

十全同窓会会報 174

2020 / 1



目次 | CONTENTS

新年のご挨拶……………02	十全学術行脚……………10	同窓生の消息……………29
就任挨拶……………03	医学展2019……………15	学生課外活動報告……………31
服部信名誉教授を偲んで…04	病院紹介……………16	俳句紹介……………34
受賞……………05	教室だより……………18	十全昔話……………36
学会報告等……………08	支部だより……………20	学生コーナー……………38
Student Doctor	クラス会……………26	第13回金沢大学
認定証授与式……………09	支部活動……………28	ホームカミングデイ開催…39

新年のご挨拶



十全同窓会会長
中村 信一

新年あけましておめでとうございます。

同窓会会員の皆さまには、お元気で新春をお迎えのことと、お慶び申し上げます。年頭にあたり、母校金沢大学医学類・医学系ならびに十全同窓会の発展と、会員の皆さまのご健勝、ご活躍をお祈りいたします。本年は母校創立158周年、同窓会発足88周年になります。同窓会会則第二条「本会は、会員相互の親睦を図り、母校の発展を期することを目的とする。」、このことを新しい年の初めに、改めて胸に刻みたく存じます。

さて、昨年5月に新しい元号「令和」が始まりました。母校医学系・類及び病院におきましても歴史的な内科再編、臓器別かつ一つの内科としてまとまって機能する診療・研究・教育体制が4月からスタートしました。また、病院では、長年の課題であったヘリポートが中央診療棟屋上に完成し、正面玄関前には樹齢約300年の「のとキリシマツツジ」が植樹されました。これらは、将来、令和が始まった年の記念的事業として語られるでありません。

年頭にあたり、昨年および本年の母校に関係したことを幾つか紹介させていただきます。第一には、医学系・類及び附属病院における外科再編についてであります。本年は、臓器毎の機能単位を再構成するとともに、横断的に“一つの外科”として運営する外科を目指して外科再編の準備が進んでおり、昨年の内科再編と併せて新たな教育・研究・診療体制が構築されることと期待いたしております。2021年度に受審予定の国際認証取得に向けての、海外研修を含むカリキュラム改革とともに大きな成果が得られることを強く願っています。第二には、平成28年4月に開設された金沢大学大学院先進予防医学研究科(共同大学院、博士課程)の件です。設立4年目の本年3月に第一期生が社会に出ます。本大学院は、世界で活躍する予防医学者の育成を目的としており、昨年は、10月にドイツの

ハインリッヒ・ハイネ大学との研究協力を促進するため第2回日独先進予防医学シンポジウムを金沢で開催する等、大学院博士課程におけるデュッセルドルフ大学との二重学位プログラム締結に向けての交流が着々と進行しており、早期のプログラム締結を期待する次第です。なお、昨年3月には、長年深い交流があるハノイ医科大学と医薬保健学総合研究科及び先進予防医学研究科の間に二重学位プログラムが締結されました。第三には、附属病院に関する件です。昨年6月にドクターヘリの運用開始、9月には防災ヘリの運用開始、さらには、「がんゲノム医療拠点病院」(90病院が申請、34病院が認定)の認定を受け、また、従来からの前立腺癌と胃癌に加えて、肺癌・縦隔腫瘍・腎癌・膀胱癌・子宮癌においてもロボット手術の保険適応の施設認定を受ける等、地域の「最後の砦である附属病院の使命」を果たす臨床・研究の拠点病院として益々充実して参りました。ぜひ、臨床研究中核病院として選定されますことを強くご期待申し上げます。

金沢大学は、平成28年度から始まった第三期中期目標・中期計画において、第3類型、いわゆる「世界卓越型大学」を選択しました。また、平成29年度には世界トップレベルの研究拠点プログラム(WPI)に採択され(「ナノ生命科学研究所」設置)、さらに、昨年8月には令和元年度文部科学省「卓越大学院プログラム」に、「ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム」が採択されました(先進予防医学研究科が金沢大学の医薬保健総合研究科等、3研究科とともに申請。29大学44件申請、9大学11件採択)。医学類・系におきましては中核として金沢大学の「世界で卓越した教育研究」を牽引されることを強く願っています。

本年も会員の皆さまにとって、また、母校ならびに同窓会にとって、よい年になりますよう祈念申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。

就 任 挨 拶



岩瀬 剛 博士

(平成4年卒業)

優れた人材の育成に力を注ぎ、 魅力ある医局を創りたい

令和元年10月1日付で秋田大学大学院医学研究科眼科学講座の教授を拝命いたしましたので、謹んでご報告させていただきます。

秋田大学大学院医学研究科眼科学講座教授に就任

私は平成4年に本学医学部を卒業し、河崎一夫教授の主宰する金沢大学眼科に入局しました。大学での研究と並行しながら、複数の市中病院で眼科医としての経験を重ねてきました。特に網膜硝子体手術には力を注ぎ、平成14年に米国Harvard大学の世界的に有名である本学出身の広瀬竜夫教授の下へ網膜硝子体手術の研修に行きました。

帰国後、現本学眼科教授の杉山和久先生のご指導の元で臨床研究を進めながら、平成15年より富山県立中央病院で学んできた手術技術をもって数多くの網膜硝子体手術を行いました。さらに臨床から出た疑問を解決するために基礎研究を行いたいと考え、平成20年より米国Johns Hopkins大学に留学し、遺伝子治療や新生血管の抑制などの研究に約4年間従事しました。帰国にあたり、さらに網膜の研究を進めたいと考え、本学出身の寺崎

浩子教授の主宰する名古屋大学眼科に入局し、今までで2万件以上の眼科手術を執刀しながら研究を進め成果を挙げることができました。

振り返ると、私は多くの本学出身の偉大な先輩方に金沢の地のみならず色々な場所でお会いし、多くのご指導をいただくことができ、今の私があるのも十全同窓会のお陰だと考えております。このような私が秋田大学に今後どれほど貢献できるかは分かりませんが、ご指導をいただきました諸先輩方を見習い、優れた人材を育て、魅力ある眼科医局を創っていきたいと考えております。

最後に、母校医学部と十全同窓会の更なる発展をお祈り申し上げます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



伊藤 英樹 博士

(平成8年卒業)

ヘルスケアサイエンスの エビデンスの構築を目指して

令和元年8月1日付けで広島大学病院医療安全管理部の教授を拝命しました。私は平成8年に本学医学部を卒業し、金

広島大学病院医療安全管理部教授に就任

沢大学病院旧第二内科に入局いたしました。馬淵宏教授と清水賢巳助教授のご指示のもと、北陸圏内の循環器診療に携わっていましたが、平成17年に地元滋賀県に帰郷後は滋賀医科大学に勤務しておりました。平成28年からは医療安全業務にも関わるようになり、今回、ご縁があり広島大学に赴任することとなりました。

近年の医療技術の進歩により、日本人の平均寿命が80歳を超えた今、人々は単に「長生きする」ことだけでなく、「健康に生きる」ことにより関心が高まっており、医療の質の向上が益々要求される時代になっています。そこで必要条件的に派生したこの分野ではありますが、まだ20年の歴史しかない発展途上の領域であり、全国国立大学病院において専従教授が配置されている大学は10を超え

る程度で、人材が不足しているのが現状です。時代のニーズに応えるために早急に関連病院や他大学と連携体制を整え、ヘルスケアサイエンスに関わるエビデンスを発信できるような臨床研究に取り組む必要があります。私においては初代教授ならではの利点から、医療の質・安全向上のために永続的な文化を醸成していくことができるよう臆することなくチャレンジしていきたいと思います。プロ野球のシーズンには街中がカープの赤に染まるように、広島県の郷土愛が強い土地柄も関係して、広島大学病院は市、県、医師会等との間でさまざまな連携・交流があります。地域でのつながりを活かして、広島大学がイニシアチブを取り、広島県全体の医療の質向上を達成できるよう取り組んでまいります。

服部信名誉教授を偲んで

システム生物学教授 金子 周一

「患者のため」の精神を大事にし、 優れた内科医を多数輩出

金沢大学医学部内科学第一教室の第16代教授であります服部信先生におかれましては、令和元年10月9日に享年93歳でご逝去されました。

先生は大正14年11月18日に石川県金沢市で生を受け、昭和20年に第四高等学校を卒業し、東京大学医学部に進学されました。卒業後は東京大学第三内科の研究生として籍をおかれ、昭和32年に医学博士を修得されました。留学先のエール大学附属病院において肝臓病学の研究に取り組み、約3年間を過ごされました。帰国後は、東京の国立がんセンターに昭和49年8月まで勤務され、同年9月に金沢大学の教授として着任されました。昭和61年4月から昭和63年3月まで金沢大学附属病院の病院長を兼任されました。平成元年6月に都立駒込病院院長として赴任されるまでの約14年間、金沢大学に奉職されました。

服部先生の教室の運営方針は臨床を重視し、それに基づく研究に取組むことのようにでした。先生は早朝の日課としてハリソン内科書を音読されるほど臨床に熱心で、特に剖検においては、診療した患者やその家族への誠意の現れであるとの信念を持っておられました。また、当直明けの報告をするために教授室を訪れる教室員に、昨夜の入院患者の経過や重症患者の容態を事細かに質問されました。答えることができなかったとき「当直者は、当直している時間帯は、主治医に代わって全ての入院患者に対する責任を負うものです。急変した際に慌ててカルテをめくって情報を調べるのですか？前もって患者の状態を知っておかなければ、迅速で適切な対応は取れませんよ！」と諭されたとのことでした。教授回診の際はベッドサイドで矢継ぎ早に医局員に質問され、一寸でも答えに窮すると、すぐ詳細な検討ができる「ラウンドで」と宣告する徹底ぶりでした。質問される若い医師



服部信名誉教授

は、どうしても検査結果を記憶していることが必要となり、教授回診前夜の当直室は多くの教室員が泊まっていました。ある意味、とても怖い教授でしたが、自然と質の高い医療を学ぶ姿勢が叩き込まれていきました。これらのことは「患者のため」の精神を誠に大事にしておられた為で、当時を知る教室員の間で語り継がれてきました。

学生教育にも重きを置かれ、講義で使用するスライド原稿を何日かけて、ご自身で用意されていました。私も教授室を訪れた際にハリソンの教科書が開かれていたところを拝見し、こうして準備をされるのかと驚いたことを覚えています。

研究においては、前教授の武内内科の研究態勢をそのまま生かしつつ、専門グループとして内分泌・代謝、消化器、高血圧・腎、循環器の4つのグループをおかけしました。全てのグループが学会活動を活発に行い、多くの研究業績を残しました。各研究室は服部教授の意向により、総合内科として各臓器を超えた研究を行うことができ、内分泌・代謝グループと消化器グループでの共同研究、高血圧・腎グループと循環器グループでの共同研究が行われました。今でこそ、学際的研究、臓器を乗り越えた研究が行われていますが、その先駆的な研究方法の推進者として、服部教授の先見の明に感じるところです。これもひとえに診療も研究も「病でなく患者を診ることが大切」であると考えておられたからだろうと思います。

ご自身の研究テーマは肝がんでした。着任されて間もない時期からγ-GTPアイソザイムを始めとする生化学的腫瘍マーカーの探索に意をおかれ、その発見

と臨床応用についての研究を推進されました。その後、肝炎ウイルスと肝がんとの関連を注目され、背景にある免疫異常の研究、肝炎に併存する肝線維化、肝血行動態の研究も進められました。次代の教授となられた小林先生の代に引き継がれる、分子生物学を用いたB型肝炎ウイルス類似のウッドチャック肝炎ウイルスと肝がんの研究も開始されました。

学外活動においては日本消化器病学会総会会長、日本肝臓学会総会会長の大役を務められました。昭和50年より同57年まで「がん診断を目標とした臨床科学の研究班」の班長、昭和63年には「非A非B型肝炎と肝がんに関する研究」の班長を務められるなど、国内の基礎と臨床研究を融合することによって世界に誇る研究成果を次々に発表し、服部先生は国際的にも知られた、我が国を代表する教授でした。教授の著書は「ウイルス肝炎から肝細胞癌へ」、「腫瘍マーカー」など多数にのぼります。

服部先生は多数の優れた内科医を輩出されました。先生の薫陶を受けた医師が地域で患者のために、そして学会で医学の発展のために活躍することを最大の喜びとしておられたようです。東京に行かれたあとも教室員のことを気にしておられました。学会でお会いするたび、教室員の何かの知らせをお伝えするたび、そして同窓会で教室員の活躍を聞くたびに、とても嬉しそうにしておられたことを思い出します。ご高齢になられて外出でなくなった後も、学会誌や同窓会誌に付箋を挟んで教室員の活躍を読んでおられたとのことでした。先生は都立駒込病院を充実した機能の大病院にされ、また、附属する研究所において国際的な研究が進むように大きな貢献をされたと聞いております。

このように、信念をもって生涯を貫かれた服部先生の歩みは、臨床や研究、そして人としての在り方において、今日を生きる私たちに深い感慨を与え続けております。ここに、先生の長年のご指導に感謝しつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

受賞

秋の叙勲

河北 公孝

(昭和48年卒業)

瑞宝双光章

近藤 邦夫

(大学院58年度修了)

旭日小綬章

中村 信一

(昭和43年卒業)

瑞宝重光章

第33回北國がん基金 研究活動助成受賞

三輪 真嗣

(平成15年卒業)

金沢大学医薬保健学総合研究科
整形外科

この度、研究課題「肉腫における腫瘍免疫状態の解明と新規治療法の開発」で、第33回北國がん基金研究活動助成を受賞しましたので報告させていただきます。

近年、腫瘍分野の研究では腫瘍免疫に注目が集まっており、腫瘍免疫における免疫チェックポイントを標的とした治療薬が開発され、メラノーマや肺がんにおいて有効性を示しています。一方、肉腫における免疫チェックポイントの研究はわずかであり、肉腫においても免疫状態の評価や免疫チェックポイント阻害薬の有効性評価が必要と考えられます。

当科では、標準的治療に抵抗性の肉腫患者に対して、樹状細胞を用いた免疫療法を臨床試験として行い、その安全性、有効性を評価しました。臨床試験の結果として、一部の患者において強い免疫反

応を認めたものの、全体的としては、「肉腫における樹状細胞療法は、重篤な有害事象はなかったが、有効性は一部の症例に限られた」という結果でした。これまでもさまざまながんにおいて樹状細胞療法が行われ、一部の患者で有効性を示すことが報告されてきましたが、無効例においてどのような治療阻害因子が関与しているのかはほとんど分かっていません。本研究では、樹状細胞療法を受けた患者の試料について免疫状態を調査することにより腫瘍免疫の抑制状態が治療阻害因子となるのかを調査すること、さらに免疫チェックポイント阻害と樹状細胞療法の併用療法の有効性と安全性を評価することを計画しています。目標としては、この研究によって免疫療法の有効症例の選択方法、免疫療法の効果を高める方法を示すことにより肉腫治療の発展に貢献したいと考えています。

最後に、今回の研究助成受賞にあたり、ご指導いただきました整形外科教授土屋弘行先生をはじめ、教室の先生方、共同研究者の先生方に深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

ISOLS 2019(Athens) 1st Best Poster Presentation Award受賞

五十嵐健太郎

(平成17年卒業)

金沢大学医薬保健学総合研究科
先進運動器医療創成講座特任助教

この度、2019年9月にアテネで開催された第20回国際患肢温存学会(ISOLS2019)で1st Best Poster Presentation Awardを、演題名「Newly developed bone targeting platinum complex effectively targets cisplatin resistant relapsed osteosarcoma in a patient-derived orthotopic xenograft (PDOX) mouse model」にて受賞いたしましたことを謹んでご報告申し上げます。

本学会は骨軟部腫瘍に関する最大の国際学会として2年に1回開催され、基礎研究から実臨床まで熱く議論が交わされる場となっております。研究内容は私が大学院生時代から整形外科教室土屋弘行教授、山本憲男特任教授、薬学部小谷明教授にご指導いただき、引き続き留学先の米国カリフォルニア州立大学サン

受賞

ディエゴ校外科学教室ロバートホフマン教授のもとでも取り組んだ新規プラチナ製剤の骨肉腫に対する効果についての研究になります。

金沢大学で小谷明先生が開発された新規プラチナ製剤は骨との親和性が高く、骨形成性悪性腫瘍である骨肉腫治療の切り札とすべく基礎的な研究を行ってまいりました。本研究では標準治療後に再発を来した患者さんから得られた検体をマウス的大腿骨に移植するモデルを樹立し、臨床上のシスプラチン耐性がモデル上に再現できる点と、その耐性を新規プラチナ製剤が克服することを明らかにしました。年間発症患者数が少なく(日本国内で年間250名程度の新規発症)、企業での創薬開発に困難を伴う骨肉腫に対する新規治療開発は、大学ならではの使命であると感じております。

今後、さらにこの研究を継続し、難治性骨肉腫患者さんへの福音となるべく努めてまいりたいと存じます。今回の受賞にあたりご指導いただいた金沢大学整形外科教室教授土屋弘行先生をはじめ、教室、国内外の共同研究者の先生方に感謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては今後もご指導の程どうかよろしくお願いいたします。

第133回中部日本整形外科災害外科学会学会奨励賞受賞

吉谷 純哉

(平成23年卒業)

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科
整形外科学

この度、第133回中部日本整形外科災害外科学会、学会奨励賞を「インプラント周囲感染に対する抗生剤含有脂肪由来幹細胞のバイオフィルム形成阻害能についての検討」の演題にて受賞いたしました。

たことを謹んでご報告させていただきます。本賞を受賞するに当たりまして、お力添えいただきました関係各位の方々に厚くお礼を申し上げます。

受賞演題のテーマですが、人工関節手術における術後感染症の新規治療法の開発に関するものであります。インプラント周囲感染症は人工関節手術において最も治療に難渋する合併症の1つであります。その治療法は過去からほとんど進歩することなく、徹底的な洗浄と抗生剤の長期投与が行われていることが現実です。しかしインプラント周囲は血流が乏しく抗生剤の移行性が悪いため感染が治癒しないことが問題となっておりました。そこで私たちは間葉系幹細胞の働きに着目し、これを感染治療に応用する技術を開発することといたしました。まず金沢大学分子薬物治療学との共同研究にて、間葉系幹細胞の1つである脂肪由来幹細胞に抗生剤を担持させる手法を考案し、その定量化を行いました。そしてこの抗生剤含有脂肪由来幹細胞をインプラント周囲感染モデルラットに対して投与する検討を行いました。その結果抗生剤単独投与より有意に感染が制御されているという結果となりました。これにより脂肪由来幹細胞の感染治療への応用という手法を開発することができたと考えております。現在当研究室では、臨床応用へ向けよりよい投与方法の検討を行っている段階であります。

最後に本賞をいただくに当たりまして、ご指導いただきました金沢大学整形外科教室教授土屋弘行先生をはじめ、同准教授加畑多文先生、および研究に多大なお力添えいただきました先生方に感謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましても、今後ともご指導の程何卒よろしくお願いいたします。

第133回中部日本整形外科災害外科学会学会奨励賞受賞

谷口 裕太

(平成23年卒業)

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科
整形外科学

この度、第133回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会におきまして、「骨巨細胞腫に対するcyclolinopeptideの抗腫瘍効果」の演題にて学会奨励賞を受賞いたしましたことを謹んでご報告申し上げます。今回の受賞に当たり、ご指導・ご鞭撻ならびにご支援して頂いた全ての方に、心より御礼申し上げます。

骨巨細胞腫は2013年のWHO分類でintermediateに分類される骨腫瘍ですが、その局所再発性の高さから治療に難渋し、ときには肺転移を起こし致命的となる疾患であり、腫瘍の浸潤にはNF- κ B ligand (RANKL) の発現が重要であることが知られています。本研究で着目致しましたcyclolinopeptideは、アマ科の一年草であるアマ(学名: *Linum usitatissimum*) から抽出されるペプチド性化合物で、近年の研究ではマウスにおいてRANKLシグナル阻害作用を有することが判明しました。そこで骨巨細胞腫においてcyclolinopeptideはRANKLシグナルを阻害し抗腫瘍効果を示すという仮説の下、本研究を開始いたしました。研究の結果、cyclolinopeptideは培養した骨巨細胞腫細胞においてRANKL発現を阻害し、また細胞増殖抑制効果を示すことが分かりました。また、RANKLの上流に存在するrunt-related transcription factor 2 (RUNX2) の発現も抑制することが判明し、その作用機序に関与している可能性が示唆されました。*In vitro* のデータでありcyclolinopeptideの作用機序はまだ完全には解明されておりませんが、骨巨細胞腫に対する新規治療薬

開発の礎となるよう今後も研究を発展させてまいり所存です。

今回の研究・受賞に当たり、金沢大学整形外科学教授土屋弘行先生、共同研究させていただいた星薬科大学生薬学教室森田博史先生、金田利夫先生をはじめ、ご指導、ご鞭撻いただきました多くの先生方に深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

第8回国際D-アミノ酸学会 奨励賞受賞

中出 祐介

(平成30年度大学院修了)

金沢大学附属病院検査部

この度、第8回D-アミノ酸学会奨励賞を受賞いたしましたことを謹んでご報告申し上げます。本賞の受賞にあたり、大学院在学中から熱心にご教授いただきました和田隆志教授をはじめ、岩田恭宜先生、古市賢吾先生、坂井宣彦先生、北島信治先生、遠山直志先生、研究室の先生方、共同研究者の先生方、スタッフの皆さまに心より感謝申し上げます。

受賞講演名であります「MECHANISM OF KIDNEY-GUT CROSSTALK VIA D-AMINO ACIDS DERIVED FROM MICROBIOTA」は、私が大学院時代から取り組ませていただきました研究テーマです。腎臓は、全身の恒常性を維持する最たる臓器の一つであり、寿命にも関連することが最近の研究から明らかにされております。しかしながら、腎臓が遠隔臓器に影響をおよぼす詳細なメカニズムにおいては不明な点が多く、その解明が望まれています。近年、さまざまな疾患で腸内細菌叢が変化し、その代謝産物が生体へ影響をおよぼすことが報告され

てきています。そこで、腎臓病でも腸内細菌叢が変化し病態に関与すると仮説を立て検討を行いました。興味深いことに、腎障害に伴い腸内細菌叢が変化し、アミノ酸の光学異性体であるキラルアミノ酸、ことにD-アミノ酸が産生されることが分かりました。そのうち、D-セリンなどは腸管から血中を介して腎臓へ到達し、腎障害に対して保護的に働くことを明らかにすることができました。このD-セリンは腎機能とも非常に良く相関し、新規の腎臓病バイオマーカー候補として臨床応用を目指しております。このような研究背景に基づき、現在では腎臓病で起こる様々な合併症と、今回同定いたしました新規の臓器間ネットワーク因子でありますD-アミノ酸との理解を深められるよう、研究に取り組んでおります。

今後も、本研究を発展させ患者さまの福音に繋げられる成果を目指して誠意努めてまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

令和元年金沢大学学長賞受賞

山内 真之

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科

医学専攻

腎臓内科学

この度、令和元年度金沢大学学長賞を受賞いたしましたことを謹んでご報告申し上げます。今回の受賞にあたり、あらゆる面からご指導いただきました腎臓内科学教室和田隆志教授をはじめ、教室スタッフ、金沢大学ならびにサポートをしていただきました全ての方に心より感謝申し上げます。

これまで、日本医療研究開発機構研究班「糖尿病性腎症の進展予防に向けた病

期分類—病理—バイオマーカーを統合した診断法の開発(和田隆志班長)」の研究成果を複数の論文にまとめてまいりました。これらの成果により、幸いにも令和元年度の日本腎臓学会賞Clinical Scientist Awardを受賞させていただきました。糖尿病性腎症の病態解明に関する研究に取り組もうと思ひ本学の門戸を叩きましたが、大学院の4年間にこの研究を大きく発展させることができませんでした。これは先輩方が築き上げて来られました糖尿病性腎症に関する多くの知見がこの教室に集積していることだけでなく、それに甘んじることなく活発な議論の中から絶えず新しい研究がこの教室から生まれていることにあります。

近年、糖尿病性腎症を原因とする透析導入患者が増えていることもあり、糖尿病性腎症の病態解明の重要性が益々高まっております。我々は厚労省・日本医療研究開発機構研究班の糖尿病性腎症コホートを用いて、糖尿病性腎症の臨床・腎病理の解明を行ってきました。特にこれまで明らかにされておられませんでした蛋白尿陰性の糖尿病性腎症の臨床・病理特性および腎・生命予後を明らかにすることができました。また、蛋白尿陰性の糖尿病性腎症の腎障害進展因子は間質の線維化であることを明らかにすることができました。これらの結果は、腎障害進展の病態を考える上で重要な知見となるため、本研究は国際的にも評価され、学術誌『Diabetes Care』に掲載されました。

改めまして、大学院で取り組みました糖尿病性腎症の病態解明に関する研究が評価されて、名誉ある賞を賜りましたことは誠に光栄に存じます。今後におきましても、この賞に恥じぬよう、本研究を発展させて成果が出せるように努めてまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導どうぞよろしくお願い申し上げます。

受賞

第44回日本足の外科学会学術集会
最優秀ポスター賞受賞

濱田 知

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科

医学専攻

整形外科学

この度第44回日本足の外科学会学術集会最優秀ポスター賞をいただくこととなりました。受賞した研究は、当院でこれまで撮影された足のMRIを使用して大伏在静脈の位置を調べた研究です。近年、Suture Buttonという金属のボタンと頑丈なワイヤーを使用して脛骨と腓骨

を寄せることで足関節の安定性を再建する手術方法が広く行われるようになりました。しかし、この方法は腓骨外側と脛骨内側にボタンを設置するため脛骨内側にある大伏在静脈や伏在神経を損傷するリスクが出現します。そのリスクが高いことは死体解剖を使用していくつかの報告で証明されていますが、大人数での研究報告は調べうる限り存在しませんでした。血管神経損傷のリスクを減らすためには、血管神経がどのあたりを走行しているかを調べる必要があり、そのためには多くの足を調べることが必須と考えました。そこで、当院の過去の足のMRIを抽出したところ、2005年から2018年の間の足関節及び足のMRIが600肢以

上あり、その中で不適切症例を除外した352肢ものMRI画像が今回の研究に当てはまりました。

今回の研究によりSuture Buttonによる大伏在静脈や伏在神経を損傷するリスクが高いことを証明し、またより損傷リスクの少ないボタンの設置角度についても報告することができ、授賞式の際にも学会理事長からも非常に興味深い研究であるとお褒めの言葉をいただき非常に嬉しく思いました。今回の受賞にあたり、さまざまな面でご指導いただきました整形外科教授の土屋先生、足の外科班班長の松原先生、およびその他同門の先生方に深謝いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

学会報告等

第2回日独合同先進予防医学シンポジウム開催報告

日時／令和元年10月3日(木)、4日(金) 場所／石川県政記念しいのき迎賓館

去る10月3日、4日、石川県政記念しいのき迎賓館において、「第2回日独合同先進予防医学シンポジウム」が開催されました。ドイツのハインリヒ・ハイネ大学(デュッセルドルフ大学、HHU)からの研究者13名をはじめ、金沢、千葉、長崎大学から約200名の研究者が参加しました。本シンポジウムは、大学院先進予防医学研究科(金沢、千葉、長崎、三大学による共同大学院)および先進予防医学研究センターの共催で、HHUとの「二重学位プログラム」確立に向けた教育及び研究協力の一層の促進を図る目的で開催されたものです。

初日の午前中には、本シンポジウムに先立って三大学共同大学院の中間発表会が行われ、金沢、千葉及び長崎大学の学生14名が日頃の研究成果を発表し、所属大学以外の研究者(副指導教員等)から直接の指導・助言を得られる絶好の機会となりました。三大学共同大学院として初めての合同中間発表会でしたが、学生

の研究発表のレベルが高く、参加した研究者からご好評いただきました。

午後からのシンポジウムでは、「糖尿病と代謝」、「環境と健康」、「免疫と感染症」、「神経疾患」の4つのテーマが取り上げられました。マイケル・ローデン教授(HHU)、川上純教授(長崎大)、近藤克則教授(千葉大)、金子周一教授(金沢大)による基調講演をはじめとして、四大学の研究者12名がそれぞれの研究分野で

の最新の知見について講演を行い、活発な討議がなされました。このシンポジウムでの相互交流と議論を通じて、四大学の研究者の相互理解がさらに深まり、幾つかの研究分野では、日独共同研究の開始に向けて合意がなされました。これらの活動が、HHUとの「二重学位プログラム」の確立に繋がることと期待されます。

(先進予防医学研究科長
市村 宏：記)



Student Doctor 認定証授与式

令和元年11月28日、系統試験や共用試験を乗り越えて5年生への進級が確定した私たちは、Student Doctor認定証授与式を迎えることができました。和田医学類長からStudent Doctor認定証を受け取り実際の医療現場で働くことへの実感が湧き始め、和田先生からのお言葉を受け臨床実習を充実したものにしようという気持ちが一層高まりました。また、蒲田病院長のお言葉で今後は社会人という意識の下行動すべきだという認識も高めることができ、まずは挨拶や時間厳守といった根本的なことに意識して取り組むことの重要性を再認識いたしました。

入学以来、私たちは主に講義室で医学知識を学んできました。さまざまな疾患やその基本となる生命現象を理解する過程は決して容易ではありませんでしたが、それでもただ座っているだけで医学知識

を提供して頂ける環境で親しい友人とのみ関わり過ごせばよい状況というものは今後ほぼ訪れないのだと思います。一方で、これからは臨床の場での学びとなります。学ぶべきものは膨大ではある上にいずれも自ら積極的に勉強、経験する姿勢が必要となります。更に、適宜割り付けられたあまり顔なじみのない学生も多いグループで、大学病院のみならず遠く離れた市中病院で学ぶ場面も多々訪れます。このような場合では実習の前後に自ら目標や疑問点を明らかにし、知識を深めるプロセスがより重要になると思われます。また、自分だけでは解決できない問題にぶつかることも増えることが予想されます。このような事項はグループ内で共有して解決に向けて努力し、それでも困難な場合は先生方にもご指導頂き一つずつ乗り越えていきたいと思っています。

当然ではありますが、私たちの実習にご協力いただく患者さんへの敬意を忘れず過ごしていきたいと思っています。同時に、これまで支えて頂いた家族や先生方への感謝の気持ちを持ち続け、将来医師として立派な姿を見せることで恩返しをすることを目標に毎日の実習に意欲的に取り組んで参ります。まだ医師ではない私たちにできることはあまりありませんが、Student Doctorとして患者さんに安らぎや幸せを少しでも与えられればと思います。

最後になりましたが、Student Doctor認定証授与式を開催してくださった先生方や学務の方々、関係者の皆さまに4年生を代表して感謝申し上げます。ありがとうございました。

(医学類5年 坂賀 綾：記)



お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、
寄稿をお待ちしております。

〒921-8640 金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp



金沢医科大学キャンパス

金沢医科大学は、昭和47年の開学以来、「倫理に徹した人間性豊かな良医の育成」を建学の精神とし、医学・医術・医道を3本柱としたバランスのとれた医師の育成を目指して教育に取り組んでいます。爾来、約50年の星霜を経、昭和57年大学院医学研究科開設、平成元年総合医学研究所開設、平成15年4月には大学院医学研究科の新専攻(生命医科学)改組、平成16年4月学部講座制を再編し、教育・研究の活性化と充実が図られています。令和元年10月現在、金沢大学医学部卒業・大学院修了あるいは金沢大学に勤務された十全同窓会関係の方々が、学部・病院・研究所に66名(31部門)在籍しています。また、法人役員として、竹越襄・顧問(前理事長、昭和38年卒業)、高島茂樹・理事長(昭和43年卒業)、勝田省吾・前学長(昭和46年卒業)、松本忠美・副理事長(金沢医科大学氷見市民病院CEO、昭和51年卒業)、川上重彦・理事(昭和51年卒業)、梶博久・理事(金沢医科大学氷見市民病院長、昭和54年卒業)がご活躍です。学術行脚では、数回に渡って現職で在籍される方々の学術内容を紹介いただきます。今回は、第1弾として基礎、内科系・外科系からお寄せいただいた19名の方を講座別に掲載させていただきました。

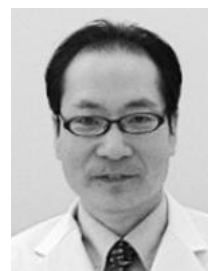
(横山 仁:記)

1. 岩淵 邦芳 主任教授(昭和59年卒業) 医学部・生化学Ⅰ



私は1984年に金沢大学医学部を卒業し、直ちに当時の第三内科に入局しました。前教授松田保先生、現教授中尾真二先生のご指導のもと、骨髄移植における移植免疫の研究を行い、1988年に金沢大学大学院医学研究科を修了しました。ニューヨーク州立大学ストーニブルック校へ留学した後、1995年より金沢医科大学血液免疫内科に在籍し、1998年に金沢医科大学生化学Ⅰに移籍しました。その後、2009年に生化学Ⅰ主任教授、2016年に副学長、2017年に大学院医学研究科長に就任しました。教育では、第1学年の細胞生物学講義、第2学年の生化学講義と実習を担当しています。研究では、DNA損傷発生時の細胞応答、特に自身で見出した53BP1というタンパク質に着目してDNA二重鎖切断の修復機構を調べています。若い教室員とともに奮闘中です。

2. 櫻井 勝 准教授(平成9年卒業) 医学部・衛生学



平成9年卒業後、金沢大学第一内科に入局し、内分泌代謝内科で診療に従事しました。糖尿病の予防に興味を持ち、平成19年から金沢医科大学公衆衛生学にて中川秀昭先生(現本学総合医学研究所嘱託教授、昭和50年卒業)、三浦克之先生(現滋賀医科大学教授、昭和63年卒業)のご指導のもと、疫学・予防医学、公衆衛生学を勉強してきました。職域コホート研究を実施し、またNIPPON DATA研究や血圧と栄養に関する国際共同研究INTERMAPなど国内外の疫学研究にも参加させていただき、生活習慣と疾病との関連を研究しています。平成28年に衛生学に移籍してからは、産業衛生、環境衛生についても研究の対象を広げ、特にカドミウム慢性中毒の疫学研究では、中川先生をはじめ、能川浩二先生(昭和40年卒業)、城戸照彦先生(昭和54年卒業)など金沢大学出身の先生方にご指導いただきながら、研究を行っています。

3. 新井田 要 教授

(副所長、先端医療研究領域長)(平成2年卒業)

総合医学研究所・ゲノム疾患研究分野



私は卒業後、小児科学教室に入局し、長らく遺伝性疾患、小児神経疾患の診療と研究に携わってきました。

平成20年から子

どものこころの発達研究センターに、平成25年より金沢医科大学総合医学研究所に移り、現在はゲノム医科学の研究とともに、金沢医科大学病院ゲノム医療センターで診療に従事しています。この間の解析技術の進歩は目覚ましく、DNAマイクロアレイや次世代シーケンサの登場により、個々の遺伝子レベルからゲノム全体の構造と機能を解析する時代へと変化しました。その一方で、患者さんを置き去りにするかのような研究、検査が横行し、他方では患者さんにとって本当に必要な遺伝学的検査が供給されていないなど、新たな倫理的・社会的問題が生じています。研究所で開発した技術を、外来を訪れる患者さんにダイレクトに還元できる立ち位置にいますが、最先端のテクノロジーを患者さんの実医療に落とし込む難しさを日々痛感している次第です。

4. 横山 仁 主任教授(昭和55年卒業)

医学部・腫瘍内科学



現在、総合医学研究所・所長、金沢医科大学病院・副院長(診療部長)を兼任しています。旧第一内科の出身で金沢大学附属病

院血液浄化療法部より平成18年に着任し、「総合的な腫瘍内科学」をテーマとして教育、診療、研究を行っています。現在、日本腎臓学会腎臓病総合レジストリーの構築運用を担当し、厚労科研・AMED研究の分担研究者として難治性ネフローゼ症候群や腎移植の疫学・臨床研究を推進しています。研究テーマであ

る1)腎炎・ネフローゼ症候群の臨床病理学、2)血液浄化療法の臨床的応用、3)移植腎障害の臨床病理学的研究について、ループス腎炎、難治性ネフローゼ症候群、特に膜性腎症の新たに見出された自己抗体や移植腎障害におけるアデポサイトカイン、non-classical HLA分子、二重鎖DNA損傷の研究により腎障害機序の一端を解明しています。

5. 古市 賢吾 特任教授(平成5年卒業)

医学部・腎臓内科学



旧第一内科の出身で、横山仁主任教授の2代後の金沢大学附属病院血液浄化療法部長を務め、平成31年4月より着任しま

した。急性腎障害における炎症機序の解明や、稀少遺伝性疾患疾患から疾患特異的iPS細胞を樹立し、腎発生と修復に関わる因子の解明などの研究を進めています。また、金沢大学腎臓内科、和田隆志教授のもと進めてきた、糖尿病性腎症の病理学的解析についての研究も継続して行っています。現在、血液浄化センター副部長も兼務しています。

6. 元雄 良治 主任教授(会員Ⅱ)

医学部・腫瘍内科学



元雄教授(東京医科歯科大昭和55年卒業)は、昭和55年に旧第一内科に入局し、がん研究所腫瘍内科で澤武紀雄教授の

もとで膀胱癌を中心に腫瘍マーカーや膀胱ストレス蛋白の研究と腫瘍内科の臨床に携わり、平成17年に金沢医科大学に腫瘍内科学教室を立ち上げるために赴任しました。診療面では集学的がん治療センター長として、各科からの外来化学療法の依頼に腫瘍内科として対応しています。またがんセンターを運営し、化学療法委員会委員長としてレジメン審査等に

従事しています。教育面では、内科総論・医学総論・医学英語への参加・腫瘍総論の責任者・第5、6学年の臨床実習を担当しています。研究面では総合医学研究所先端医療研究領域腫瘍制御研究分野教授を併任し、膀胱癌の薬剤耐性の分子機序解明とその克服を主なテーマとしています。北陸がんプロフェッショナル養成プランでは、金沢医科大学のコーディネーターとして金沢大学と連携しており、がんプロ認定機構理事を務めた。また石川県がん診療連携協議会の委員として、学内ではがん診療連携拠点病院運営委員長も務めています。

7. 安本 和生 特任教授

(平成5年大学院修了)

医学部・腫瘍内科学



安本特任教授は、平成元年6月金沢大学がん研究所附属病院・腫瘍外科に入局し、故磨伊正義教授のもとで、腫瘍外科医として

消化器がん臨床とくに胃がんの診療に携わり、研究面では元東大教授で現在東京理科大学の松島綱治先生よりがん病態の増殖因子・サイトカインを中心とした分子生物学的解析研究を学びました。平成18年よりがん研附属病院角間移転統合後腫瘍内科一本化の方針のもと、腫瘍内科教授矢野聖二先生のもと腫瘍内科医として臨床・研究両面に携わり日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医を取得し、平成27年より金沢医科大学腫瘍内科学に移り現在に至っています。臨床面では、集学的がん治療センター副センター長・化学療法委員会副委員長、またがんゲノムセンター副センター長として、がんゲノム医療を含む院内薬物療法の円滑な運営推進に従事しています。研究面では、学内総合医学研究所先端医療研究領域を併任し、海外大手製薬企業との産学連携、シーズ開発から知財・産学連携構築に向けた中部先端医療開発円環コンソーシアムへ積極的に参加しています。教育振興

面では、北信がんプロオネコロジーセミナー委員を務め、腫瘍学の教育啓発に努めています。

8. 梶波 康二 主任教授(昭和59年卒業)

医学部・循環器内科学



梶波康二教授は、旧第二内科において竹田亮祐、馬淵宏両名誉教授のもとで、脂質代謝異常と動脈硬化症に関し遺伝子レベル

の研究に従事しました。1999年11月金沢医科大学循環器内科に転任。2004年9月同主任教授に昇任し、以後心血管疾患全般の診療を担当するとともに、学年主任・副主任として十数年に渡り医学部生教育指導、さらには大学院生研究指導を通じて、「良医の育成」に関わっています。研究面では、下肢閉塞性動脈硬化症における予後予測因子としての酸化LDLの意義など、臨床に直結したテーマを掘り下げるとともに、平成20～22年度NEDOプロジェクト「マイクロドーズ臨床試験」や「スタチンによる筋障害発症の遺伝素因探索」を始め、新規治療法開発に向けた共同研究に参画し成果を挙げてきました。また新専門医制度に関しては内科学会の中心メンバーの一人として、その整備と運営に関わっています。

9. 古田 壽一 臨床教授(昭和55年卒業)

医学部・総合内科学



私は昭和55年に金沢大学医学部を卒業し、神経精神医学教室(山口成良教授)に入局しました。睡眠の臨床研究グループ

に所属し、抗うつ薬の睡眠に及ぼす影響、睡眠時無呼吸症候群を含めた高齢者の睡眠障害、アルツハイマー型認知症の睡眠ならびにコリン系賦活薬による効果などについて研究を行いました。また、長寿科学振興財団の助成で、平成10年8

月から翌年3月までアルバート・アインシュタイン医科大学モンテフィオレ医療センターの睡眠覚醒障害センターに留学し、ナルコレプシーや睡眠時無呼吸症候群の加齢による病態の変化について研究を行いました。平成13年4月に国立療養所(現：国立病院機構)北陸病院に院長として転出しました。

金沢医科大学へは当時医科大学病院の集学的医療部睡眠医学センターのセンター長をされていた榎博久教授(呼吸器内科学講座主任)にお呼びいただき平成26年4月に赴任いたしました。現在、集学的医療部を統括する医学部の講座である総合内科学に籍を置き、睡眠医学センターで診療を行っております。

10. 中川 淳 臨床教授(昭和59年卒業)

医学部・糖尿病・内分泌内科学

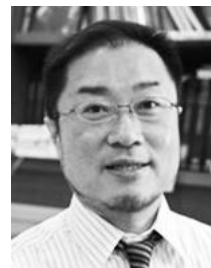


金沢大学第二内科より金沢医科大学に赴任して21年目になりました。現在の糖尿病腎症を中心とした教室において、多くの

糖尿病症例とともに、下垂体・甲状腺・副甲状腺・副腎と内分泌臨床の全域にわたる幅広い症例を経験させていただいています。そのような中で、他科の多くの先生方より、それぞれの領域での内分泌の専門家として信頼をおいていただいていることは、喜ばしい限りです。この臨床内分泌内科の考え方を次の世代に伝えるため、学内のみならず、内分泌学会北陸支部での女性医師企画の一環として「臨床医のための内分泌症例セミナー」を発案、今年第6回まで毎年深く関わらせていただいています。研究面では、恩師の故中林肇先生からいただいた迷走神経求心性線維によるインクレチン感受機構に関する宿題を、少しでも…と、未だ諦めていないこの頃です。

11. 犀川 太 主任教授(昭和58年卒業)

医学部・小児科学



卒業後、小児科学教室で小児血液悪性腫瘍の診療と研究に携わり、平成20年7月から金沢医科大学小児科学教室の運営、

診療、研究と医学生教育に従事しています。総合診療科としての小児(内)科は1科で大学病院1個分の臓器別診療対象をカバーしなければなりません。現在、新生児医療、小児血液悪性腫瘍、小児循環器、小児神経、小児内分泌代謝、小児アレルギーはそれぞれ分野で高度の専門性を保ちつつ、地域医療との連携を進めています。一方、各専門の境界領域にも対応できる力が必要です。「専門分野はできて当たり前。ニッチを支える力が底力」と考えて、専門分野を極める一方で、小児科医としての基礎力向上ができる環境作りに奔走しています。

12. 川上 重彦 名誉教授・嘱託教授

(昭和51年卒業)

医学部・形成外科学



昭和51年3月金沢大学を卒業して、同年4月に金沢医科大学形成外科学教室に入りました。その後、塚田教授の薫陶の下でキャ

リアを積み、平成4年に同教室助教授に、平成8年には6カ月間米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)形成外科客員教授を務めた後、平成9年4月から平成29年3月まで20年間同教室の主任教授を務めました。その間、平成22年10月から3年6カ月金沢医科大学病院の病院長を務めるという貴重な機会をいただきました。また、平成27年には教室に在籍する十全同門会員の念願であった金沢大学に形成外科が診療科として立ち上がりました。立ち上げにご尽力いただいた金沢大学の関係各位にあらためて御

礼を申し上げます。現在は法人の理事を務めるとともに形成外科嘱託教授として少し形成外科診療に関わっております。金沢医科大学形成外科、金沢大学形成外科の発展を楽しみに日々を送っております。

13. 坂上 陽彦 助教(平成20年卒業)

医学部・形成外科学



平成20年に金沢大学を卒業し、臨床研修を地元の小松市民病院で修了後、金沢医科大学形成外科に入局いたしました。形

成外科医として身体に生じた組織の異常や変形、欠損を治療するだけではなく、形態的により正常に、より美しくすることで患者さんのQOLの向上に深く関わることができ、充実した日々を送っています。最近では患者さんの要望も多様化し、それに応えるべくまだまだ精進しなければならぬと思っています。北陸3県の病院に出向する機会がありましたが、その度に金沢大学の繋がりを感じています。現在は再び金沢医科大学に戻り、出向先の病院の諸先輩方から指導していただいた経験を臨床に生かしつつ、大学病院ならではの症例からさらに学びを深めている途中です。どの病院でも学ぶことが多く、瞬く間に臨床経験年数が過ぎていきました。今後は自身の知識・技術の向上はもちろんのこと、それを少しでも後輩たちに還元できたらと思っています。

14. 井川 祐一 助教(平成23年卒業)

医学部・形成外科学



金沢大学を卒業し、9年目になりました。地元である北陸で医療に携わりたいと思い、臨床研修を黒部市民病院と金沢大学

附属病院のたすきがけで過ごしました。

研修医時代にローテートした形成外科に興味を持ちましたが、当時母校に形成外科学の講座はなく、金沢医科大学形成外科学教室に入局しました。初代塚田教授も、川上前教授も私と同じ母校出身であり、親近感を感じながら入局したことを覚えています。日本の形成外科創設に携わってきた先生方が在籍され、古い歴史を持ち、北陸の症例を一手に引き受けており、扱う疾患も多いです。そのため、全国的に形成外科の分野としても有名でありながらも、医局の雰囲気は良く、大変お世話になっております。年々形成外科の需要性は高まり、2017年に母校に形成外科が標榜診療科として独立したことは非常に嬉しいことであり、これからも北陸の形成外科の発展に寄与したいと考えております。

15. 島田 良浩 助教(平成24年卒業)

医学部・形成外科学



平成24年に金沢大学を卒業後、母校と関連病院で臨床研修を行いました。初期臨床研修時に形成外科での再建手術に魅力

を感じ、川上重彦教授(現同名誉教授)の主宰する金沢医科大学形成外科に入局しました。現在は厚生連高岡病院形成外科に出向しており、外傷、難治性潰瘍などを中心に診療にあたっています。特に糖尿病や閉塞性動脈硬化症などの下肢難治性潰瘍の治療には他科との連携が重要になりますが、院内には多くの十全同窓会の諸先輩が在籍されているため、非常に円滑に診療を進めることができます。今後とも挑戦する気持ちを忘れずに生まれ育った金沢、そして北陸の地で形成外科医として研鑽を積んでいきたいと思っています。

16. 出雲崎亜紀子 助教(平成24年卒業)

医学部・形成外科学

(石川県立中央病院形成外科出向中)



平成24年に金沢大学を卒業後、2年間の臨床研修を金沢大学附属病院の“たすきがけ”プログラムで修了し、平成26

年に金沢医科大学形成外科へ入局しました。当時、金沢大学には形成外科が存在せず、研修医2年目の夏に訪れた2回の見学と、冬に地域医療として小松市民病院で研修させていただいた1カ月のみで進路を決定しました。まったく未知の領域へ進む不安もありましたが、当時の川上重彦教授の温かいお人柄や医局の明るい雰囲気、豊富な手術、人間の整容面・機能面を重視した特殊な分野であることに魅了されました。その後、金沢大学には形成外科診療班が誕生し、同門の諸先輩が活躍されていることは卒業生として大変嬉しい限りです。入局から6年目の平成31年4月からは形成外科専門医として、これまでよりも多くの手術を経験する機会を与えていただき、日々の仕事に懸命に、楽しみながら取り組んでいます。

17. 田中 和 助教(平成28年卒業)

医学部・形成外科学



平成28年に金沢大学を卒業した後、七尾市の恵寿総合病院で2年間の臨床研修を修了し、金沢医科大学

形成外科に入局しました。金沢大学で過ごした6年間には形成外科に触れる機会は少なかったですが、形成外科では腫瘍、外傷、先天性疾患などあらゆる疾患を扱っており、同様の疾患であっても身体のさまざまな部位で発生するために治療方針は千差万別であり、機能のみならず形態的にもより正

常に、より美しくするという点が他科にはない魅力と感じて、この道を選びました。症例一つひとつに多くの学びがあり、日々上級医からのフィードバックを受けて、学びの多い専門研修を送っています。

18. 川瀬麻衣子 医員(平成28年卒業)

金沢医科大学病院・形成外科



私は平成28年に卒業後、富山県立中央病院で臨床研修を行い、金沢大学形成外科に入局しました。金沢大学の形成外科は

2014年に皮膚科の中の形成外科診療班として新設され、2017年から標榜診療科として独立しました。形成外科として入局者は私が1人目だったのですが、皮

膚科の先生方にもご協力いただきながら、手厚くご指導いただいております。現在は金沢医科大学で先天異常や手の外科領域、悪性腫瘍術後の再建などを勉強させていただいています。金沢医科大学で学ばせて頂いていることを活かし、今後は金沢大学形成外科の発展のお力になれるよう精一杯努力してまいります。

19. 鳥居 祐希 医員(平成28年卒業)

金沢医科大学病院・形成外科



卒業後、臨床研修を終え、金沢医科大学形成外科学教室に入局しました。学生の頃は形成外科がどんな診療科なのかほとんど知りませんでした。臨床研修のときに

救急外来で外傷の患者さんの診療にあたる機会が多く、それをきっかけとして形成外科学を志しました。実際に形成外科を回ってみて、植皮や局所皮弁、瘢痕形成の手術が特に興味深いと思ったのを覚えています。入局後、大学に勤務して2年目となります。石川県内にいながら他大学の教室に入局することに対し当初は不安が大きかったですが、医局にはさまざまな大学の出身者が集まっており、金沢大学出身の先生も多くいるためとても心強く思っています。日々勤務する中で、いまだにはじめて経験することや新しい知識と出会うことの連続です。より知識を深め、手術手技を向上できるよう努めてまいりたいと思います。

教授退職記念講演会のお報せ

謹啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて金沢大学医薬保健研究域医学系(循環救急蘇生科学分野)稲葉英夫教授・金沢大学医薬保健研究域医学系(消化器・腫瘍・再生外科学分野)太田哲生教授・金沢大学医薬保健研究域医学系(血管分子生理学分野)多久和陽教授には令和2年3月31日をもって医学系教授を御退職されます

それに際しまして その御高徳と御功績に対し感謝の意を表したいと存じ左記のとおり記念講演会を挙行することとなりました

つきましては 御多用のところ誠に恐縮ですが 記念講演会への御臨席を賜りますようお願い申し上げます

令和2年1月吉日

謹白

金沢大学医薬保健研究域医学系長

和田 隆志

記

記念講演会

日時 令和2年3月2日(月) 午後3時から

場所 金沢大学宝町キャンパス医学類G棟2階 第3講義室

演題 「地域集団基盤型研究が明らかにした院外心停止の予後改善のための方略とその効果」 稲葉 英夫 教授

「Unmet medical needs に目を向けた外科医の挑戦」 太田 哲生 教授

「血管研究に導かれた新たな機能脂質とのめぐり逢い」 多久和 陽 教授

(記念講演会後の記念式は行いません)

事務担当 医薬保健系事務部総務課総務係
(電話番号) 076-265-2100

医学展 2019

日時／令和元年10月26日(土)・27日(日)

場所／医学類キャンパス

医学展も終わり、寒さがひとしお身にしみることとなりました。同窓会の皆さまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。10月26日、27日に開催されました医学展2019は、2日間で2,654人の来場者を迎えて大盛況のうちに無事閉幕することができました。同窓会の皆さま方には医学展開催に向けてご支援、ご協力を賜り、学生一同心より御礼申し上げます。私たち医学生が地域の方々に対してできることは非常に限られております。社会のためになろうと医療者を志したものの、社会に出るまでは何かを地域に対して成し遂げるのが難しいのが現状です。そうした中で医学展は地域貢献の場であり、地域医療の実践の場であると思うのです。

今年も医学展という文化祭を通して盛大に健康の維持と増進を働きかけました。

今回の医学展のアンケートを見てみると、「一生懸命やっているのが伝わる」、「学生の皆さんとても優しくて、子供にも優しくて来てよかったと思いました」等のご意見をうかがうことができたことから、医学展は地域の方々に大きな意味を持つと改めて感じました。ご来場の皆さまに力を与えられるような医学展。参加する学生が協力して、それぞれの持つ力を存分に発揮できる医学展。そして、生きる力、みなぎる力を医学の力で伝えられるような医学展を創り上げたい。そんな思いを込めて医学展2019は「力ーチカラー」をスローガンに掲げて開催しました。

当日はご来場されたお客さまには大変満足していただき、学生一同力を合わせ皆で医学展2019を創り上げることができたと自負しております。今振り返ってみても今年の医学展は地域の方々に難解でとっつきにくいと思われがちな医学の世界に興味を持つきっかけを提供できる場でありましたし、未熟で医学的知識が完璧ではない私たち学生が普段は受け身で学んでいる医学を発信する側に立つこ

とで理解を深め、自分自身の学習姿勢を見つめ直すことのできた機会でもありました。医学展を通じて多くを学べ、このような貴重な体験ができたのは同窓会の皆さまをはじめとするたくさんの人のご支援、ご協力のおかげです。またご支援くださった皆さま、医学展に協賛・協力してくださった地元企業、団体の皆さま、そして当日足を運んでくださったご来場の皆さまには改めて感謝の意を表したいと思います。医学展は先輩から後輩へと受け継がれていきます。来年度医学展のさらなる発展を祈るとともに、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(金沢大学医学展2019実行委員長

安田 力：記)



病院紹介

加賀市医療センター



加賀市民病院と山中温泉医療センター（旧国立山中病院）の2つの加賀市設立の病院を統合し、平成28年4月1日に、加賀市の交通の中心となるJR加賀温泉駅前に新築し開院しました。駅から市内各所へのバスはすべて病院エントランス前を経由し病院へのアクセスも良好となっています。病院建屋は免震構造であり、送電は2系統より入れるなど災害時にも医療拠点として十分機能するよう配慮しています。

現在25診療科、医師48名（うち研修医5名）、看護師289名を含む職員490名、病床は300床（HCU10床、一般245床、回復期リハビリ病床45床、地域包括ケア病床41床）で、HCUを除く290床を、トイレ、シャワー付き個室としました。各室ごとに室温調整でき、他の患者さんの声やイビキ、匂いなどから開放され、最良の環境で療養できるようにしました。病室の窓は低く広く取り、ベッドに臥床したままでも窓外を望められるよう工夫しました。プライバシーが保護され、家族や見舞い客ともゆっくり談話できることもメリットです。差額室料は徴収していませんので経済的負担を心配

することはありません。また院内感染の拡大予防や、多床室のように性別の制限がないため繁忙期の病床の有効利用にも寄与しています。全室個室には関心が高いようで、建替えを検討している全国の多数の病院から視察に訪れています。

加賀市唯一の急性期病院として「断らない救急」を掲げ、年間約2800台の救急搬送と約9000人のウォークインの患者さんを受け入れ、謝絶率も1%以下と市民のニーズに応えています。常勤医が少なく負担を軽減するため、金沢大学を始め3大学から救急医の応援をいただいているからこそ可能なことです。また休日の日中は、医師会の先生方に救急センター内で一次救急を担当していただいています。

基本方針のひとつである人材育成について、開院当初より積極的に医学生の研修を受け入れ、平成29年度から金沢大学の協力型臨床研修病院として研修医の受け入れを始め、令和元年度からは基幹型研修病院として2名の研修医が入り現在5名の研修医が在籍しています。令和2年度もフルマッチ3名の研修医が予定され、将来を担う医療人の育成に努めて

います。

地域連携センター「つむぎ」を設置しています。ここには病院スタッフによる入退院支援室および地域医療連携室に加え、市の地域包括支援サブセンターの保健師やケアマネージャー、地域医療推進室の職員が入り、連携して介護認定や退院後の介護サービスが速やかに受けられるよう取り組んでいます。医療、福祉、介護の相談が1カ所で行える利点があります。平成30年には訪問看護ステーションを開設し、早期退院や終末期の一時退院に資する一方、民間の訪問看護への支援を行っています。また加賀市医師会事務局も医療センター内にあり、まさに加賀市の医療、介護、福祉の中心として市民の健康と安心を守るべく職員一同励んでいます。

開院後、地元出身のUターン医師も徐々に増えてきてはいますが、診療科によっては、まだまだ人材不足の状態です。金沢大学のご支援と十全同窓会員の皆さまのご指導を今後ともよろしくお願いいたします。

（院長 小橋 一功：記）

概要

加賀市医療センター

所在地 石川県加賀市作見町36番地

開設 明治13年3月

病院長 小橋 一功

病床数 300床

診療科数 25

沿革

明治13年

明治22年

昭和48年

平成17年

昭和16年

昭和20年

平成15年

平成28年

県立金沢病院大聖寺出張所として開設

郡制施行に伴い江沼病院に改称

町村合併に伴い公立加賀中央病院に改称

市町合併に伴い加賀市民病院に改称

山中海軍病院として開設

国立山中病院に改称

山中町に移譲され山中温泉医療センター開院

2病院統合し加賀市医療センター開院

市立砺波総合病院

金沢・富山両方向に交通の便の良い 砺波医療圏の中核病院として成長

市立砺波総合病院は富山県西部の砺波市、南砺市、小矢部市からなる砺波二次医療圏の中核病院です。砺波市は広々とした砺波平野の中心に位置し、東洋経済新報社が、毎年全国の都市を対象に調査・発表している「住みよさランキング」で平成29年には全国2位となっています。交通の便も良く、JR砺波駅からも徒歩5分、東京からは新幹線利用で約3時間、北陸自動車道砺波ICからも近いいため、当院から金沢大学病院、富山大学附属病院ともに約30分の短時間で行き来することができ、派遣医師からも喜ばれています。その効果もあってか、今年の基幹型臨床研修医も金沢大学出身2名、富山大学出身4名と毎年のように両大学からの研修医を受け入れることができています。

当院は昭和22年、当時の出町町長・故大井敏雄先生の大井医院を出町厚生病院仮診療所と改称して、医師2人、職員12名、10床でスタートしました。翌昭和23年には東砺波郡国民健康保険団体連合会立出町厚生病院として100床で診療開始、昭和31年には砺波市立砺波厚生病院に改称、昭和32年には内科、外科、小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科、眼科、精神神経科、歯科、皮膚泌尿器科、

9科、296床で総合病院の承認を受けています。創立10周年となる昭和33年には整形外科を新設し、医師15人、職員138名、325床となりました。昭和54年に医療圏ではいち早く導入したCTスキャンも契機となって、さらに順調に成長を続け、昭和56年には現在の市立砺波総合病院の名称となりました。現在は結核病床、感染病床を含め許可病床514床、医師約100名、看護師400名余、医療技術員140名余、その他の職員を含め総職員800名余の規模の中核病院に成長しました。当院が順調に成長できた大きな要因は金沢大学医局、十全同窓会の皆さまの手厚いサポートでした。現在、当院の内科、外科、整形外科、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、放射線科、麻酔科、精神神経科の常勤医は全て金沢大学より派遣いただいています。

診療体制、臨床研究では金沢大学との連携を基本に、富山県の砺波医療圏の中核病院としては富山県、富山大学との連携も行い、地域医療計画の達成に向けた協力を推進しています。

病院の取り組み 地域包括ケアシステムのハブとして

当院は医療圏の中核病院として、地域の皆さまの命を守る医療を第一に、災害拠点病院、へき地中核病院、地域救命センター、地域周産期母子医療センター、

地域がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、臨床研修病院等の指定を受け政策医療の面からも職員一丸となって、地域の医療を守っています。

平成27年度より富山県ドクターヘリが運行を開始され、昨年度は当院では富山県立中央病院に次ぐドクターヘリの受け入れをしています。内視鏡的手術支援ロボット(ダ・ヴィンチ)は平成29年に富山県内では3番目に導入しており、設備導入も積極的に行っています。

また、富山県の中核病院としては唯一、訪問看護ステーションを病院事業として平成27年から運営しています。さらに、地域包括ケア病棟、患者支援センター「おあしす」、居宅介護支援事業所の運営を通じて砺波医療圏のハブとして機能することで地域包括ケアシステムに貢献できるよう努力しています。その効果もあり、平成30年5月には地域医療支援病院の承認を得ることができました。

現在、地域医療構想、医師の働き方改革、医師の偏在対策と三位一体の改革が進んでいます。このような変革の時代の中で品質の高い医療を持続可能な形で提供するために、病院職員一同、努力を重ねてまいります。十全同窓会の皆さまのご指導・ご鞭撻を引き続きよろしくお願いいたします。

(院長 河合 博志：記)

概要

市立砺波総合病院	
所在地	富山県砺波市新富町1番61号
病院長	河合 博志
病床数	514床(一般病床461床、精神病床44床、 感染病床4床、結核病床5床)
診療科数	43

沿革

昭和22年	出町厚生病院仮診療所
昭和23年	東砺波郡国民健康保険団体連合会立出町厚生病院
昭和31年	砺波市立砺波厚生病院
昭和56年	市立砺波総合病院

教室だより

寄生虫感染症制御学

寄生虫病検査

当教室では、日常的に臨床検体を扱っています。寄生虫ってそんなにいるの？と驚かれるかもしれませんが、相談数は例年20～30件はあり、トキソプラズマ脳炎、アメーバ性肝膿瘍、クリプトスポリジウム下痢症などの原虫症や、蠕虫でも皮下腫瘍に検出された動物由来フィラリアや腸管外アニサキス症などの国内症例を、また、訪日外国人や帰国者のリーシュマニア症、マラリア、ジアルジア症、サイクロスポーラ症などの輸入感染症を報告してきました。

寄生虫病の難しさは、やはり、その稀少疾患レベルの症例の少なさにあります。原因不明の脳炎、下痢、発熱などで治療に難渋し、もしかすると寄生虫？と疑った主治医からのコンサルトで最後の最後に寄生虫病診断というパターンが典型的です。一般に使用される抗菌薬には不応ですが、ほとんどの寄生虫病には効果的な治療薬がありますので気軽に当教室にご相談いただければと思います。

研究紹介

発展途上国におけるフィールドワークをベースに腸管寄生原虫の分子疫学研究を実施しています。届出疾患に指定され比較的知られているアメーバ赤痢、ジアルジア症、クリプトスポリジウム症以外

にもヒトの腸管には多様な原虫がみられます。ただ、非病原性とされてきたために、ほとんど研究されず、分子分類も多く、原虫で未確立という現状があります。

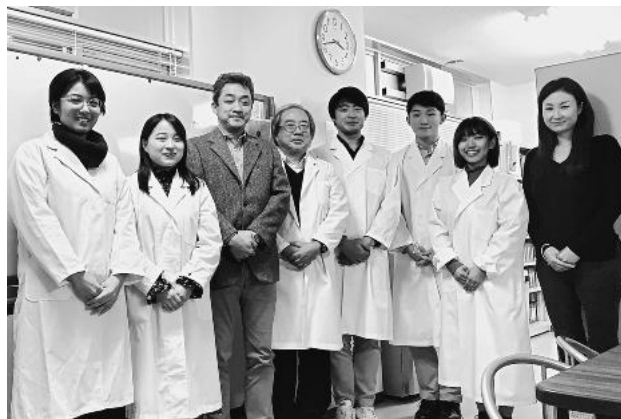
しかし、「非病原性」という形質はヒトへの寄生適応を示唆しており、このような原虫はヒトと共進化してきた共生体です。そこで、「非病原性腸管寄生原虫のヒトの腸内環境における常在原虫叢としての役割を明らかにする」ことを目的に一連の研究を実施してきました。

1. 非病原性腸管寄生原虫の分子分類

途上国における分子疫学調査を繰り返して実施することで、腸管寄生原虫の分子同定法を確立してきました。腸トリコモナス、ヒトブラストシスチス、腸レトルタモナスではその種内多型を明らかにし、また、大腸アメーバやハルトマンアメーバといった、これまでの分子疫学では無視されていた原虫類についても特異検出を実現し、ヒトの腸管内に存在する非病原性原虫の網羅的分子同定法を確立しました。

2. 非病原性原虫のヒトへの影響

途上国における腸管寄生原虫の網羅的分子同定法をもちいた疫学調査は、原虫とヒトの関係に新たな知見をもたらしています。たとえば、ウイルス学とのケニ



ヤでの共同研究では、これまで日和見原虫と考えられてきたアメーバ類がHIV感染者よりも、むしろ健康人で感染率が高いことが判明。また、インドネシアの調査では、病原性原虫であるジアルジアが蔓延地域の学童に実は病原性を示さないこと、また、一部の非病原性原虫では、その局在がむしろ下痢予防に働いている可能性など、ヒトの腸内恒常性の維持における原虫の役割の一端が明らかになってきました。

おわりに

寄生原虫の有用性を見出し治療応用の可能性を探る研究を目指し、出生から学童期までの寄生虫の初期感染/局在動態を評価するコホート研究がインドネシアにおいて進行中です。

当教室での学位取得者は、パレスチナ、バングラデシュ、インドネシア、ケニアで活躍しているほか、国内では広島大学、藤田保健衛生大学、北陸大学などで寄生虫研究への取り組みを進めています。

(所 正治：記)

スタッフ

准教授	所 正治
事務補佐員	重山 朋子
協力研究者	岡澤 孝雄、及川陽三郎
大学院生	1名
MRT	3名

研究分野の沿革

寄生虫学教室は昭和25年6月に開設されたが、初代渡辺四郎教授、その後の教室主任太田五六助教授とともに専門は病理学だった。昭和49年、本学出身の寄生虫学者である吉村裕之教授が就任し寄生虫学研究が開始された。平成3年からは近藤力王至助教授(平成7年教授)が教室主任を担当したが、平成7年末の同教授退官後の後任は補充されず講座は消滅。平成12年の井関基弘教授の赴任で再開し、平成17年4月から所正治准教授が教室主任となり現在に至る。

呼吸器内科学

呼吸器内科学教室は、扱う疾患が悪性腫瘍、アレルギー、感染症、自己免疫性疾患など多岐にわたることもあってか多様な個性の集まりですが、肺胞・気管支・気道に関わる難治性疾患をどうにかしなければならぬ、という思いでひとつにまとまっています。また、重症や終末期に向かう患者さまを担当することもあり、責任とやりがいを感じながら日々診療を行っています。

診療と研究

入院患者で最も多くを占める疾患は肺がんです。診断と進行期の薬物治療を行っています。近年、分子標的治療や免疫治療が進行期非小細胞肺がんを用いられるようになり、予後は大幅に延長しています。また術後化学療法や放射線化学療法後の追加免疫治療など、早期および局所進行期に対しても薬物治療が行われています。我々は、笠原寿郎呼吸器内科科長を中心に、呼吸器外科や放射線治療科、病理診断科の先生方と連携をとりながら肺がんに対する診断と薬物治療を行っています。これまでの治療実績が評価され、国内で行われるglobal臨床試験の約半数に参加しています。これらの結果からいくつかの標準治療が確立され、我々も少なからずそれらに関わってきました。研究では、関連施設の先生方にもご協力いただきながら、後ろ向き観察研究や肺がん関連遺伝子異常のバイ

オマーカー研究を進めています。多施設で免疫チェックポイント阻害薬を受けた全症例の

データを収集し予後因子の探索を行っています。また、血中遊離DNAを安定して抽出するシステムを整備し、当院呼吸器外科や京滋阪神方面の大学、臨床試験グループとの共同研究を進めています。

外来診療では、慢性咳嗽、慢性閉塞性肺疾患(COPD)、気管支喘息の患者さまが多く通院されています。咳嗽は内科受診の主訴として最も多い症状の一つですが、慢性咳嗽患者に対する治療に難渋されている先生方も多くいらっしゃると思います。藤村政樹前呼吸器内科科長(現七尾病院院長)が提唱したアトピー咳嗽は、慢性咳嗽の主な原因の一つとして広く認知されるようになりました。カプサイシン咳感受性試験やメサコリン気道過敏性試験などを用いた病態診断法を古くから導入し、最近は咳過敏と咽喉頭異常感覚、環境真菌と咳との関連、呼気凝縮液など臨床検体を用いたメタボローム解析によるバイオマーカー探索の研究を進め、「止まらない咳はない」(藤村先生)のもと、難治性慢性咳嗽の診療・研究に励んでいます。また、気管支温熱形成術を取り入れ、長年苦しんできた難治性喘息が劇的に改善した症例を経験しています。

間質性肺炎は、その診断の難しさから、呼吸器内科の専門性がより求められる疾



患です。特発性肺線維症は、長年治療方法が確立されていませんでしたがピルフェニドンやニンテグニブなどの抗線維化薬が登場し、適した治療方法を選択するためにより正確な病型診断が求められています。診断のために重要な手掛かりとなる肺胞洗浄液中の炎症細胞分画解析を院内で迅速に行い、必要性に応じて呼吸器外科と病理診断科の先生方にご協力いただきながら外科的肺生検による詳細な病理診断をしていただき、正確な病型診断に結びつけています。また、間質性肺炎は膠原病など全身性疾患の一つの病態として現れることがあります。腎臓内科やリウマチ・膠原病内科、皮膚科など他科との連携はかかせず、院内の膠原病カンファレンスは日常診療に大変役立っています。

おわりに

これからも、診療や研究はもちろんのこと、学生教育や若手医師の育成に、教室員一同尽力してまいります。十全同窓会の諸先生におかれましては、今後とも温かいご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(木村 英晴：記)

スタッフ

准教授 笠原 寿郎(診療科長)
特任准教授 曾根 崇(地域呼吸器症候学講座)
講師 木村 英晴(医局長)
助教 原 丈介(病棟医長)、
大倉 徳幸(外来医長)、
阿保 未来(保健管理センター)
医員4名、大学院生6名、事務補佐員2名、
技術補佐員1名

研究分野の沿革

1969年に開講した内科学第三講座の呼吸器グループの流れをくみ、北陸の呼吸器内科診療を支える医師を多く輩出してまいりました。金沢大学医学系研究科および金沢大学附属病院における内科再編に伴い、2019年4月1日より新たに「呼吸器内科」としてスタートし現在に至っています。

支部だより

愛知支部

令和元年7月13日(土)、第33回金沢大学十全同窓会の愛知支部総会が名鉄グランドホテルの北京宮廷料理「涵梅舫」において開催されました。

今回は近況報告をしていただける富田勝郎先生、ご講演をお願いした西村玲子先生とともに、今年2月に名古屋市立大学整形外科教授に就任された村上英樹先生(平成5年卒業)にも来賓として来ていただくことができました。

まず開会のことばの後、この1年の間に訃報の届いた先生方、松原稔先生(昭和20年卒業)、武内修先生(昭和25年卒業)、大門一誠先生(昭和24年卒業)、曾我恒夫先生(昭和25年卒業)、太田一二先生(昭和19年卒業)のご冥福をお祈りして黙祷を捧げました。次に支部長の水上哲秀先生(昭和47年卒業)より挨拶があり、今回中日文化賞(各分野で優れた業績を挙げ、文化の向上に寄与した個人・団体に中日新聞社より贈られる賞)を受賞された寺崎浩子先生(昭和55年卒業)に愛知支部として七宝焼の記念品を贈呈したことなど、記念写真のスライドとともにお話ししていただきました。続

いて村上先生からご挨拶がありました。まだ名古屋は不慣れで、名古屋メシもまだ口に合わずと正直にお話しされ、笑いが沸き起こりました。先生はすぐフォーラムの座長の仕事があるため、富田先生のご講演の途中で退席されました。

その後、田中順子先生(平成15年卒業)の幹事就任が報告されました。今後ともよろしくお願いします。

同窓会本部の近況報告では、まず富田先生が開発した世界初の術式である腫瘍脊椎骨全摘術についてお話していただきました。噂には聞いたことがありましたが、今回動画も拝見することができ、椎体が摘出される場所では文字通り度肝を抜かれました。その後、明治から平成にわたる医学部の歴史をお話していただきました。宝町から浅野川方面に降りたところはかつて田んぼしかなく、実験用のカエルはいつもそこに捕りに行っていたこと。それがすっかり市街地になったのはその向こう遠くに角間キャンパスができたから。そしてその移転を医学部が免れたのはその当時教授会で移転反対で一致したから、といったことをお話していただきました。

次に西村先生より「元ちゃんハウスであなたと生きる」という演題でご講演をしていただきました。西村詠子先生は西村元一先生の奥様で、ご主人が亡くなっ

た後も精力的に講演活動をなさっています。内容はご主人のお書きになった2冊の単行本を読んでいただけたらと思います。レビュー評価も高いです。ただ、奥様が最も我々会員におっしゃりたかったことは、仕事が忙しくても健診をちゃんと受けなさい。自分と家族のために。ということかなと思いました。

そして記念写真の撮影の後、懇親会が横田徳久(昭和35年卒業)先生の乾杯の音頭とともに始まりました。今回は参加者が29名と少なかったものの、若い先生方が久しぶりにお見えになったり、活気のある懇親会となりました。懇親会の間、テーブルに富田先生が開発されたティーソーが回覧されました。見たことはあったのですが触ったことはなく、とても柔らかく、細く繊細で、これで骨がどうやって切れるのだろうと、実に不思議でした。

懇親会の楽しい時間はいつもあつという間です。今年は最年少会員として初めてお見えになった前田悠智先生(平成30年卒業)が会員の今後のご活躍とご健康を祈って万歳三唱して、それをもってお開きとなりました。

来年も若い先生を中心に総会が盛り上がっていくことを願っております。

(近藤 俊樹：記)



福井県支部

令和元年8月25日(日)、第70回十全同窓会福井県支部総会が嶺南地区の担当で、49名の会員が参加してニューサンピア敦賀で開催されました。本部からは中村信一十全同窓会会長、特別講演講師として高村雅之金沢大学医薬保健研究域医学系循環器内科学教授をお迎え致しました。

定刻に開催された総会では、お亡くなりになられた10名の会員の先生方への黙とうの後、森田信人福井県支部長の挨拶、ご来賓の中村信一十全同窓会会長のご挨拶をいただき、議事に入りました。報告事項では、平成30年度会務報告、支部会員数と会費納入状況が報告されまし

た。協議事項では、令和元年度会務計画案、平成30年度の会計報告がなされ、承認されました。また、役員改選が協議され、森田信人先生が支部長を退き、後任の支部長に久保田紀彦先生(現、副支部長)が、副支部長に岡田忠彦先生(現、幹事)が就任されることが決定しました。

特別講演は令和元年に教授に就任された高村雅之先生(平成5年卒業)が、「高齢者に対する優しい高度医療：構造的な疾患に対する内科治療」と題して講演されました。弁膜症に対するカテーテルやデバイスを駆使した先進医療の説明および自験例を提示されました。拡大した治療の選択肢の中で、個々の患者に対してしっかり判断し向かい合う姿勢を示されました。会員の先生からは予定時間をオーバーする多数の質問があり、会員の先生方のこの分野に対する関心の深さと向学心の高さが感じられました。司会は

高村先生から指導を受けている市立敦賀病院循環器内科医長三田村康仁(平成11年大学院卒業)が務めました。

記念撮影の後、川上究敦賀市医師会長(昭和51年卒業)の開会挨拶で懇親会が始まりました。アトラクションは敦賀市民合唱団による「合唱」で、合唱団の中心的役割を担っておられる熊谷幹男先生(昭和48年卒業)が指揮をされました。なじみのある曲であり、その歌声に会員一同聴き入っておられました。加藤好夫先生(昭和37年卒業)の乾杯挨拶の後、時間を忘れ和やかなひと時を過ごしました。宴たけなわではありましたが、次回開催地となる高志地区代表横山修先生(昭和57年卒業)のご挨拶と竹内桂一先生(昭和33年卒業)の閉宴挨拶で、再会を期し閉会となりました。

(米島 學：記)



支部だより

福井市支部

令和元年6月25日(火)、午後7時より、ユアーズホテルフクイにて、令和元年度福井市支部総会が開催され、支部会員30名が参加されました。令和の時代、初めての福井市支部総会でした。

柏原謙悟副支部長の司会で、まず、本年度物故会員の故清水郁郎先生、故本多明義先生、故高澤嘉邦先生、故宮崎憲太郎先生、故西浦幸男先生、故堀江達雄先生のご冥福を祈り黙祷を捧げました。

岡田忠彦福井市支部長の挨拶の後、福

井市医師会長に就任された柏原謙悟副支部長にお祝いが贈呈されました。その後、議事に入りました。報告事項として、平成30年度会務報告および福井市支部会員数と会費の納入状況についての報告がありました。

続いて令和元年度の協議事項の検討が行われ、平成30年度の会務報告、平成30年度の金沢大学医学部十全同窓会福井市支部収支決算が報告され、山内茂樹監事より監査報告があり、承認されました。令和元年度の予算案が報告され、承認されました。承認されました。続いて、福井支部役員の改選があり、支部長に田中延善が承認されています。

続いて松村幸司先生の座長で、宮下洋

亮先生により「網膜硝子体疾患 最近の話題」と題して講演がありました。眼科専門外の先生方には、網膜硝子体疾患に対する新たな知識を習得することができ、改めて眼科領域の進化に感銘を受けていました。

参加者全員での記念撮影終了後、早川幸紀副支部長のもと懇親会が開かれました。副支部長田中延善の挨拶、出席最長老の飯田和質先生の乾杯で宴会が始まりました。和気あいあいの歓談さらに同じ釜の飯を食べた会員相互の親睦を深めました。村北和広副支部長の挨拶で閉会になりました。

(田中 延善：記)



静岡支部

令和元年9月28日に静岡市駅前のセンチュリーホテルにおいて、金沢から古川仍名誉教授をお招きして金沢大学十全同窓会静岡支部総会が開催されました。9月の最終土曜日ということで、学会や研究会などと重なったにもかかわらず、静岡県内から16名の会員の方々にご参加いただきました。

総会はまず、石神幹事の司会のもと、佐野同窓会静岡県支部長のご挨拶の後に、来静いただきました古川名誉教授のご挨拶ならびに金沢大学医学部の近況についてご講演いただきました。「医学部の近況」と題して、まず金沢大学宝町キャンパスの紹介として、病院全景、新しくなった医学類の正門、構内の桜や「のときりしまつツジ」などの数々の写真、そして金沢大学の学内の動き、講座の変遷、最近の研究発表など非常に広範囲に

ご紹介していただきました。静岡県にいる我々も如何に現在の金沢大学が世界水準での評価を受けているかなどを知ることができました。さらに古川先生のご専門の耳鼻科領域での難聴について認知症との関連やそのメカニズム、さらに今後、難聴は治癒しうる可能性など、一同大変興味深く拝聴させていただきました。

その後、前支部長の土屋先生の乾杯により懇親会になりました。次にご参加の先生がそれぞれスピーチされました。世代の違う先生が自分の金沢大学の学生時代の話から、また近況報告などを話され、次第にアルコールも入って大いに盛り上がりました。ここでも古川名誉教授からお話をいただき、個人としては大学退任後も北陸再生医療協議ネットワーク理事長など、非常にお忙しいことなど楽しくお話しいただきました。

終了後、二次会にも多くの先生がご参加いただき、夜遅くまで話は続きました。来年の再会を約束して解散となりました。今回は、森山先生、武田先生と臨床研修医2名も参加され、幅広く各年代にわた

りました。

今回の参加者以外に金沢大学卒業後に、静岡県に開業されている方や勤務されている方が相当数おられます。ぜひ、今後より多くの、特に若い先生にご参加していただき、十全同窓会、金沢大学をさらに盛り上げていければと思います。以上よろしくお願い申し上げます。

参加者：前列左から、東茂樹(昭和52年卒業)、岡井高(昭和52年卒業)、土屋和弘(昭和44年卒業)、古川仍(昭和44年卒業)、佐野勉(昭和44年卒業)、佐野三枝子(昭和44年卒業)、加藤政利(昭和54年卒業)、武田栄幸(平成31年卒業)、後列左から、内藤千絵(平成25年卒業)、石神直之(昭和55年卒業)、谷口充(昭和60年卒業)、池谷直樹(昭和58年卒業)、富松功光(昭和58年卒業)、小山澄美子(昭和58年卒業)、加藤裕之(昭和60年卒業)、梅原靖彦(昭和58年卒業)、森山枉純(平成30年卒業)

(池谷 直樹：記)



支部だより

山形支部

令和元年10月19日(土)、山形支部の総会を開催しました。今年は米沢の石橋先生が当番幹事で、赤湯温泉の「森の湯」で行われました。赤湯温泉は米沢、上杉藩の藩主の別荘の湯として知られ、現在も御殿湯として残っています。森の湯も歴史は古く、お湯はかすかに硫黄の香りがする上品な湯質で、私の好みでした。

今年は4人が集まりました。酒田の池田利史先生(昭和50年卒業)、米沢の石橋正道先生(昭和61年卒業)、公立置賜総合病院外科の森谷敏幸先生(平成9年卒業)、昭和47年卒業の私です。いつも出席される鶴岡の石原先生は私用があり、欠席でした。今年7月に金沢で行われた十全同窓会総会の様子をお話し、同窓会年会費の納入率が40%台であるため、納入のお願いをしました。その他、新任の教授の講演内容をかいつまんでお話ししました。私が興味深かったのは、組織細胞学の西山教授の講演で、自閉症の患者さんの一部にCHD8遺伝子のヘテロ

欠損が見つかり、この遺伝子のヘテロ欠損マウスを作ると、このマウスは非常に憶病(慎重?)になり、透明な通路を全く移動せず、スタート地点にじっとしているため、動画が提示されたのですが動画なのか写真なのかかわからず、会場に笑いが起こりました。西山先生のお話によると、CHD8遺伝子のヘテロ欠損は脳のオリゴデンドロサイトの分化障害を引き起こし、その結果ミエリン形成不全を起こすことが病因になる可能性があるようです。最近山形でも自閉症スペクトラムと診断されるお子さんが多く、原因は単一ではないかもしれませんが、病因の一つが解明されると大きな足場ができるのではないかと期待しています。

この1年間の特記すべきことといえば、2年前に亡くなった酒田の矢島先生の診療所を酒田の本間病院の分院として再開院して、中嶋先生が赴任されたことです。中嶋先生に感謝です。また6月18日に起きた山形県沖地震では、鶴岡で震度6弱を記録しました。山

形市でも震度4の揺れでびっくりしましたが、鶴岡の石原先生はもっと驚かれたと思います。幸い自宅も診療所も無事とのこと、何よりでした。森谷敏幸先生は置賜地区の4つの市町合同で設置した公立置賜総合病院の腹部外科のスタッフとして活躍されています。肝、胆、脾の疾患を専門としています。山形支部で最も若い先生で、活躍を期待しています。

夕食が終わって部屋に戻り、ワイン通の石橋先生がお勧めの赤ワイン数本を飲み比べて、楽しくおしゃべりをして総会が終わりました。

(森谷 直樹：記)



お見舞い

台風15号、台風19号により
被災された皆様ならびにそのご家族の皆様
心よりお見舞い申し上げます。

金沢大学医学部十全同窓会

岡山支部

令和元年度金沢大学十全同窓会岡山支部会が12月7日(土)、メルパルク岡山において開催されました。

岡山支部では毎年この時期に同窓会を開催させていただいております。今回はほぼ毎年出席されている常連の先生ばかりで、初参加の先生はおられませんでした。参加者は卒業年度順に寺沢明夫先生(昭和51年卒業)、浅海浩二(筆者岡山支部長、平成8年卒業)、高木徹先生(平成9年卒業)、梅原憲史先生(平成12年卒業)、門田弘明先生(平成12年卒業)、横溝智先生(平成12年卒業)、徳毛誠樹先生(平成13年卒業)、杉山成史先生(平成13年卒業)の8名でした。

美味しいお酒と料理をいただきながら、

学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あっという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。

今回も幹事の杉山先生に大変お世話に

なり無事に会を終えることができました。来年度こそは早めに声をかけて参加者を増やし、金沢から遠く離れた岡山での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。

(浅海 浩二：記)



ボストン支部

快晴かつ厳寒というボストンらしい冬の日に、今年(2019年)3回目となりますボストン支部会を開催致しました。今回は12月で帰国されます中河秀俊先生の送別会となりました。今年は奮わなかったボストン・レッドソックスの本拠地フェンウェイパークの南には病院や研究施設が群集するロングウッド・メディカルエリアが広がります。最近の支部会ではもっぱらロングウッド近辺のレストランでランチを楽しむスタイルが定着しつつあります。日本食も流行っていますが、今回は王道の中華料理、しかも四川料理のお店を選び、辛くて美味しい料理に汗をかきながら楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。中河先生は今年のノーベル生理学・医学賞受賞者を輩出したDana-Farber Cancer Institute

において約4年に渡り癌免疫を研究されました。ご家族共々ボストンでの生活や文化を楽しまれたそうです。ご帰国後の一層のご活躍を会員一同祈念致します。

前回の支部会より支部長が広瀬竜夫先生(ハーバード大学眼科教授)からHaruka Badger(旧姓 馬淵晴佳)先生(ブリガム・アンド・ウィメンズ・ホスピタル プライマリーケア部門)に交代と

なりました。広瀬先生には引き続き会のアドバイザーとして、ここボストンで臨床・研究に取り組む会員をサポートして頂く予定です。教室や研究グループよりボストンへ留学・転勤される方がおられましたら、是非会長へご一報いただければ幸いです(Dr. Haruka Badger: harukabadger@gmail.com)。

(寺本 了太：記)



ク ラ ス 会

昭和34年卒、 卒後60年記念クラス会

2019年11月9日(土)、ホテル日航金沢で開催された。老齢になったので、81名の卒業生のうち、すでに過半数が亡くなり、17名の会員とご夫人2名の19名の参加となった。同ホテルでの卒後50年記念クラス会に出席した時、10年後も元気で卒後60年記念の同窓会に出席できればなあー、と密かに思ったが、現実に出席できる幸せを実感した日だった。この会合が開催できたのは、ひとえに幹事役を引き受けてくれた河合君の尽

力の賜物で、ただ感謝の言葉しかないことを記してその功に報いたいと思う。「ひょっとして、これが最後のクラス会開催かもしれない」との想いで、ぜひ参加・出席したいとの希望で、入院中の病院から会場へ向かう案を考えたが、主治医の許可が下りず出席を断念した仲間もいた。会は、幹事・河合君の挨拶後、前回クラス会後亡くなった友に哀悼の黙とうを捧げてから開始された。もっとも遠方からの参加者が乾杯の音頭を取るとの默契から、福島市から参加した福島君の発声で開宴した。

奥田君がプロジェクターを持参して、昔の写真等をスクリーンに映してくれて、学生時代を懐かしんだ。全員参加の会合

との約束で、各自がスピーチしたが、卒後60年も経つとやはり自分の病気の話が多かった。恒例の小坂登志喜君の楽器演奏で楽しみ、彼の伴奏のもと、司会者に促されて西尾夫妻が歌を披露してくれて、会合を一層盛り上げてくれた。30階のル・グランシャリオで二次会後も、片町へ出かける元気な仲間も数人いたのには驚いた。

参加者：大家啓一、奥田治爾、加納昭子、河合康守夫妻、小坂登志喜、小坂牧子、瀬嵐貞雄、田中道夫、中川允宏、中村彰、中村武夫、南後千秋、西尾功夫夫妻、西出啓二郎、福島匡昭、牧野勉、松田史郎(50音順)

(中村 彰：記)



三八会

豪雪の年、昭和38年卒業のクラス会、三八会は毎年開催されてきました。昨年9月の富山市での会に引き続き、今回は令和元年10月17日(木)金沢市橋場町の金城楼で開催されました。今回の幹事は金沢在住の石崎、竹越、中西、西部、渡辺が務めました。参加者は同伴者をふくめ31名でした。開宴に先立ち、午後6時写真撮影後、この一年間に逝去された竹島俊夫君、蓮村靖君、松浦一君に黙祷を捧げました。次いで亀田健一君の事務報告、橋本勉君を次回の幹事に決め、仕舞、狂言(舟)を鑑賞後、石崎が乾杯の音頭をとり、宴に移りました。

加賀料理とアルコールで気分が和んだところで、例年の如く会員各自が近況報告を行いました。会員の年齢はすでに80歳を超えており、多くは現役とはい

え仕事量を減らしており、なかには仕事をやめている人もありました。「年をとると小便と話は長くなる」とウロの先輩から聞いたことはありましたが、まさにその通りで、笑いのなか長い面白い話を拝聴した次第でした。内容は娑婆の義務を果たし、肩の荷をおろして身軽になったせいか、ゆとりが垣間見え、趣味に関するものが多く、友人を悼む話もありました。またみなさん年の功か、話しが上手になったように見受けられました。

すでに級友の半数が他界し、寄る年波に抗い難く、我々は体力的には間もなく言わば消費期限に達しようとしているかも知れない。しかし心はさにあらずです。ここに中国の処世訓、菜根譚(湯浅邦弘訳、角川ソフィア文庫)の一条(前集196)を引用させていただきたい。「日が暮れても、夕方の景色は絢爛と輝き、歳末の柑橘類は一層良い香りを漂わせている。だから、人生の晩年に際してこそ、君子たる者は、さらに気力を充実させなければならない」。すなわち人生は晩年

こそ美しく輝く、他界した級友の志を引き継ぎ輝かせるべき、汚してはならないのだと。ただし、無理せず、楽しくの条件付きですが。茜色に染まった景色は我々に相応しいのです。

今回の三八会は、橋本勉君より令和2年に関東で開催し、多数の参加を待つとの挨拶があり、同9時竹越君の一本締め、再会を約して散会となりました。学生時代に戻った3時間でもありました。

なお幹事で相談の結果、今回の三八会では恒例の二次会、翌日の行事を取りやめました。団体行動が難しく各自が体調に合わせて自由に楽しむのが良いとの思いからでした。

参加者は一前東亜子、鍛冶友昭、倉塚均、駒井裕一、瀬尾迪夫、西部武嗣、原田久司、飯田恭子、飯田鶴二、渡辺幸夫、石崎宏夫妻、亀田健一夫妻、竹越襄夫妻、土田豊夫妻、中西功夫夫妻、中村曉夫妻、橋本勉夫妻、八田一郎夫妻、福田孜夫妻、松本由郎夫妻でした。

(石崎 宏：記)



支部活動

Letter from FUKUI

十全同窓会福井県支部長 久保田紀彦

2019年8月の第70回福井県支部総会において、第14代支部長を拝命した。福井県支部は全国で3番目に会員が多いところである。歴代支部長の本部に対する思いやりが強く、十全同窓会の記念事業の際には、全国で最も強力に寄附を募ったことが会員の語り草になっている。第6代支部長故藤田幸雄先生、第11代支部長故西浦幸男先生がその任務を果たされた。この輝かしい歴史のある福井県支部をより活性化させねばならない重責を担うことになり、不安をぬぐいえない。最近はこの支部も悩みの種となっている新入会員の減少、事業への参加者減が見られている。福井県では2019年に約420名の会員数の下げ止まり、総会出席者の下げ止まりを記録し、明るい兆しが見えている。

私は長野県上田市で18年弱、金沢市で20数年、福井県で30数年居住した。福井は人生で最後の住処になるであろう。私の人生で福井県は運命的な結びつきがある。姉の夫が三国病院勤務で、信州の山奥にしながら毎年ウニ、サザエ、カニなどを嗜むことができた。5歳のころ、父に連れられて13時間の列車の旅をして三国の海にたどり着き、遊覧船で東尋坊の景観をみて、綱を伝って頂上の茶屋に辿り着いた記憶は鮮明である。その時、菓子にお茶をこぼして叱られた。福井に住んで、福井県の多方面からの特徴を分析してみた。

福井県は幸福度日本一、教育達成度日本上位など統計上大変住みやすい県として注目を集めている。共働き度、一戸建て度なども日本一のようなものである。私は後期高齢者で勤務が少なく、屋間の近所の様子が読み取れる。車の移動状況から若い世代は平日一家総出で働きに出ている。主婦が働きに出るためか、スーパーにはたくさんの御惣菜が並んでいる。夜食は出来合いの献立で過ごす家が多いのだろうか。近所で夕飯の支度の匂いがしない。このような環境下で、医療従事者も大多数が一家総出で医院や病院を経営しているようである。

福井県は明治時代以前には北陸の中心地であった。日本の歴史に登場する人物として第26代の継体天皇が挙げられる。彼は西暦450年頃に滋賀県高島市付近に生まれた。母が丸岡出身の振姫で近江の彦主人王に嫁ぎ3人の子を産んだ。夫が亡くなり、振姫は子連れで実家に帰り育てた。丸岡や松岡には振姫一族の大古墳群がある。継体天皇は福井県で勢力を拡大し奈良の都に上った。越前武生国守藤原為時の娘にあたる紫式部が約1年間武生に滞在していた。このように1000年以上前から都の文化が根づいており、今でも武生や鯖江近辺の住民の文化度が高い。子供のころから百人一首のカルタ大会が盛んである。老人の多くが高尚の趣味を楽しんでおり、絵画、和歌、彫刻、陶芸、書道などを嗜む人が多い。私も患者さんから立派な木彫りを頂き、和室に飾ってある。認知症の患者でも書道、和歌、絵画などを思い出して作品を創造している。一方、福井県はパチンコ、競艇、競輪が盛んで男性を中心に遊行を重ねる住民がいる。共働きの悪弊と思われる。

医療環境、保育や教育環境は全国でトップクラスである。しかし、過疎化の影響で山間部では閉校する学校が徐々にみられる。また、最近熊の出没情報が増えて住民を恐怖に陥れている。福井県のは15基で、全国一の立地県である。関電と元高浜町助役の癒着の構造が露呈された。想像の域を出ないが福井県立の公共施設は関電資金援助が莫大ではなかったかと思われる。暇を楽しむ時間ができて気が付いたことであるが、観光地の遊歩道や草木類の整備はどこに行っても素晴らしい。また県立図書館、県立美術館、県立ハーモニーホール、県立グリーンセンターなどの設備は見事である。クラシック音楽ファンの私は世界の名だたる音楽家の演奏を年に数回楽しんでいる。

十全同窓会員は福井県医師会員の約6割を占めており、医療の中心的役割を果たしている。福井市医師会長は昭和52年卒業の柏原謙悟先生である。また、福井



市十全同窓会は昭和48年卒業の田中延善支部長を中心に最も活発に活動しており、県支部活動を支えている。総会は年に一度8月最後の日曜日に開催されており、数十名以上の参加者がある。この会には本部から会長と理事長に来賓としてご臨席を仰いでいる。特別講師として新任教授の講演を拝聴している。アトラクションがあり、主催者の創意工夫で楽しい音楽を聴ける。特別講師でご来福された教授には学生時代に名講義を拝聴した村上元孝先生やト部美代志先生、竹田亮祐先生が名を連ねている。最近同級生の中村信一元学長に理事長時代に5回、会長になって5回のご来福を頂いた。彼とは総会を通じて最も親しい級友になったという不思議な縁がある。今後は若年会員やⅡ会員の総会への参加勧誘が課題である。

長年福井医科大学と福井大学に奉職したものであるとして大学創設に参画した十全同窓会員の先輩について述べたい。創設者は1978年の高瀬武平初代学長で、講座や事務局の創設に辣腕を振るい、九頭龍川の河川敷に広大な学園を築かれた。高瀬先生直筆の「福井医科大学」の石碑が本部前に建立されている。3代目の学長には梶川欽一郎先生が1983年に赴任され、医学教育体制の発展に尽力された。私事ではあるが、先生は私の博士号研究を指導され、仲人もしてくださった忘れがたい恩人である。梶川先生が記念植樹された桜の白い花が事務局正門の左に冬の寒さに耐えて咲き誇っている(写真)。十全会員の教授陣は教授会では正統論を述べ論陣を張られた。特に宮保進病院長、井村慎一教授、黒田満彦教授、武藤明教授、伊崎公徳教授などは十全会員の活躍のために御尽力され、後輩を温かく見守ってください。今や福井大学医学部は福井県最大の医学医療研究の発信地となった。その研究成果は世界に発信されている。開学40年後の現在、十全会員数は減少したが、横山修教授、中本安成教授を中心に今年の第71回総会の主催者として開催準備に精魂を傾けている。今後とも本部の絶大なるご支援をお願いする。

同窓生の消息

第11回プロテオグリカン国際会議

愛知医科大学分子医科学研究所

渡辺 秀人

(昭和60年卒業)

令和元年9月29日(日)から10月3日(木)の日程で石川県金沢市の石川県立音楽堂にて第11回プロテオグリカン国際会議を開催しました。本会議は西暦奇数年に各国持ち回りで行われ、第1回が日本(木全弘治名誉教授主催)、その後はイギリス、イタリア、スウェーデン、ブラジル、フランス、オーストラリア、ドイツ、韓国、イタリアと続いて今回20年ぶりに日本で開催することとなりました。

参加者は合計168名でした。そのうち

69名が外国人で、合計20カ国(出身国を入れると合計24カ国)からの参加で、極めて国際色豊かな会議となりました。正直なところ、これほど沢山の外国人研究者が参加してくれるとは思いませんでした。特に国内外を問わず若手研究者の発表内容は画期的なものが多く、本研究分野の発展を確信しました。本国際会議の重要な目的の一つは若手研究者の育成です。この点で本会議の目的は十分に果たせたと自負しております。

主催者としてつくづく感じたのは、国内外の組織委員の方々を始め皆さんがプログラムの作成等さまざまな面で積極的に助けてくださったり手伝ってくださったことです。また日本にいととなかなか気が付かないことですが、「日本だから参加する」という人も多かったと思います。本国際会議の開催にあたり、多大なご支援・ご協力を賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。



同窓生の消息

第93回日本糖尿病学会中部地方会

福井大学医学部附属病院診療教授内分泌代謝内科科長

此下 忠志

(昭和61年卒業)

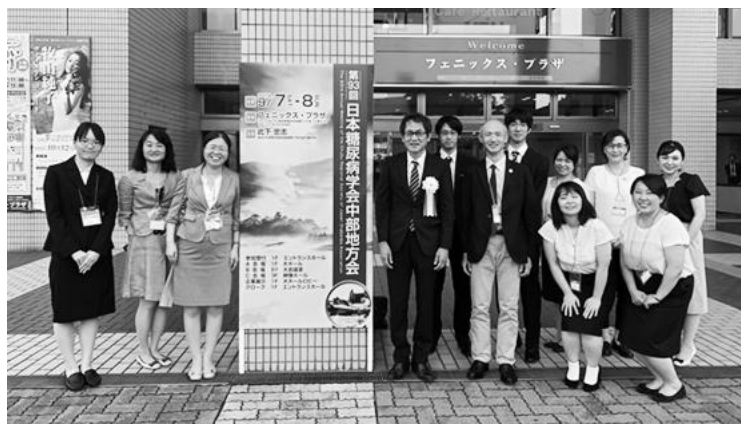
さる令和元年9月7日、8日の2日間にわたり、福井市フェニックスプラザにおいて第93回日本糖尿病学会中部地方会を会長として開催させていただきました。会場は戦災や福井地震を経て厳しい状況にあった福井の復興を祈念しての命名に由来し、福井では最も由緒ある会館です。

指定講演2、ワークショップ1、一般演題104、スポンサーセミナー8の構成で開催しました。今回は私の専門分野のひとつである糖尿病性腎臓病をハイライトしたいと考え、指定講演の一つでは、福井中央クリニックの筧田耕治部長の司

会で金沢医科大学の古家大祐教授にこの領域の最新の状況を概説いただき、もう一つの指定講演では、私が座長を担当し、金沢大学大学院未来型健康増進医学分野の米田隆教授に、糖尿病領域の高血圧に加えまさに近未来の医療像について最新のお話を賜りました。いずれも好評を博しました。またワークショップでは北陸中央病院の大家理恵先生に座長をお願いし、「新時代の社会参画と健やかな育児－しなやかな問題解決を目指して－」を企画・運営いただき、これも好評を博しました。また各種のセッションでは金

沢医科大学中川淳教授や北陸先端科学技術大学院大学の古川健治教授など、十全同窓会の皆さま方のお力をお借りして、何とか無事に学会を成し遂げることができました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

また大変名誉なことに、岡本宏先生に、激励文を頂戴しますとともに福井の地に足をお運びいただき、学会に一層の格調を添えていただきました。深い敬意とともに感激を持ちまして御礼を申し上げる次第です。



学会開催の医局員・スタッフと



岡本宏先生とともに



学生課外活動報告

西日本医科学生 総合体育大会

第71回西日本医科学生総合体育大会は、代表主管校関西医科大学のもと、令和元年8月5日から8月19日の15日間にわたって開催されました。今夏は大型台風接近がありましたが、運営側の尽力により、大会日程を遅延なく遂行できました。また例年問題となっている熱中症に関しましても、今年度は出場者全員にスポーツドリンクを配るなどの対応もあって、大事に至ることもなく、また大きな事故・怪我もなく、無事に大会を終えることができたと思われまます。

今大会における金沢大学の成績は、出場44校中21位でした。

参加した学生の感想としては、「プレッシャーに負けずにこれまでの練習の成果を十分に発揮できてよかった」というものや、「思ったように実力を発揮できずに悔しかった。来年度はこの悔しさをバネによ

りよい成績を残せるようにこれから練習していきたい」というものなどさまざまでした。

いずれにしても、西医体に向けて仲間と切磋琢磨し練習に取り組んだこと、大会を通して感じ学んだことは私たち学生にとってかけがえのない経験になったと思います。このような機会を得られたのも十全同窓会の先生方のご支援あってのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

来年度の主管校は鳥取大学となります。どの部活も、今大会の経験を生かして練習に打ち込み選手個々人が持てる実力全てを遺憾なく発揮できるように精一杯努力していきたいと思いますので、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。



(主な大会成績)

優勝

弓道個人戦 林 瑞希

陸上競技ハンマー投げ 柳川龍之介

準優勝

陸上競技ハンマー投げ 杉本 晃己

陸上競技1500m 山田 はな

陸上競技3000m 山田 はな

3位入賞

男子スキー部

陸上競技砲丸投げ 柳川龍之介

陸上競技走り高跳び 富田 瑞穂

4位入賞

水泳200m個人メドレー 竹田 紗帆

水泳200mメドレーリレー

木村/竹田/村田/斎尾

(第71回西日本医科学生総合体育大会

評議委員 将積 晃:記)

白山診療班

白山診療班は、標高2450メートルにある白山室堂ビジターセンター内の診療所において診療活動を行っています。今年は7月20日から8月31日までの間、7名の医師および30名の学生が入山し、診療所を訪れた患者さんは計133名でした。診療活動は医師中心ですが、診療所に学生しか滞在していない日も多くあり



学生課外活動報告

ます。そのような時は、学生が医療面接を行い、必要に応じて医師に電話で相談しながらできる範囲の対応をします。当然のことながら、学生は医療行為や薬の処方ではできません。また、患者さんを前に判断に迷うことも多いです。入山して下さったり、電話相談に応じてくださる医師に支えられて白山診療班の活動が成り立っています。日頃よりご尽力くださっている先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

白山診療班は昭和28年に発足し、60年以上の間室堂で診療活動を行ってきました。班員が途切れることなく長く続いてきた理由は、白山が学生にとって非常に刺激的な学びの場であるからだと感じます。まだ病院実習が始まっていない低学年の場合、実際に患者さんに問診をし

てバイタルを取るというのは日常生活でなかなかできることではありません。まずは先輩の指示通り動いて、医療面接や手当てができるようになり充足感を覚えます。学年が上がるにつれ、問診で聞くべきことは何か、必要な所見は何か、知識を総動員して考えながら患者さんと接するようになり、患者さんからとても多くのことを学びます。自身の経験や知識を生かして患者さんの役に立てた喜びを味わうこともあれば、わからないことやできないことばかりの自分に気付いて不甲斐なさを感じることもあるかもしれません。また、空き時間には班員同士で医療面接や手技の練習をしたり、散策に出掛けて白山の雄大な自然を満喫することができます。白山で積んだ貴重な経験や素晴らしい思い出が来年も登ろうという

原動力となり、白山診療班は脈々と続いていくのだと思います。

毎年夏山期間終了後には、入山した学生が集まり反省会を開いています。今年は反省会に加えて、診療班OBの先生方をお呼びして、より良い夏山にするための会議を行いました。8名の先生方が出席して下さり、活発な議論を行うことができました。会議を踏まえた来年度の活動方針として、十分な班員数を確保するため、金沢大学外も含めた医師の募集に力を入れていきます。

最後になりましたが、十全同窓会の皆さまには日頃よりご支援を賜り感謝いたしております。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

(医学類4年 平野 葉香：記)

立山診療班

富山県東部にそびえる立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高3000メートルの天上界で、年間約100万人もの観光客が訪れます。私たち立山診療班は7月下旬から8月下旬の約1カ月の間、立山で起こる登山客や観光客の疾病や事故に対し、富山県警察山岳警備隊、周辺の山小屋や環境省の方々のご協力のもと、山岳診療所にてボランティアで診療活動を行っています。室堂・雷鳥沢・剣沢の合計3カ所の診療所には、夏休みの1カ月間に、例年100名ほどの患者さんが受診されます。

今年度は学生58名が診療所に入り、診療活動にあたりました。診療所では診療活動自体は医師が行い、学生は診療の補助を行うという体制をとっています。

しかし、学生がメインで滞在している雷鳥沢診療所では医師不在の場合も多く、学生は自分達で問診をとり、医師に電話で指示を仰いで対処したり、雷鳥沢から室堂に滞在する医師のもとへ、患者さんに付き添って一時間ほどの道のりを歩い

たりすることもあります。実際の臨床の現場を体験したり、患者さんに接したりすることは、学生たちにとって非常に貴重で有意義な経験となっています。学生の生活は診療活動の補助だけでなく、山小屋での食事の準備や掃除を伴う共同生



活、山への散策なども大きなウェイトを占めています。先生方や山小屋の方々、同級生、先輩後輩、また、患者さんや他大学の山仲間との出会いと関わりの中で、勉学とはまた違ったものも学ぶことができます。

この会報をご覧の診療班卒業生の皆さまも、学生時代を思い出しつつ避暑がてらにでも参加していただければ幸いです。

に思います。今年も例年通り20名ほどの先生方が参加され診療にあたられましたが、三つの診療所を抱える立山の診療には、より多くの先生方のご協力が必要だと感じております。もしご興味ございましたら、立山診療班kum.tateyama3015@gmail.comまでご連絡ください。先生方と山小屋で一緒に過ごす日を心待ちにしております。

最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援してくださった皆さま、十全同窓会の皆さまのお陰をもちまして、本年度の活動も無事に終えることができました。厚くお礼申し上げます。

(医学類5年 池田 恵：記)

ACLS 金沢

ACLS(Advanced Cardiovascular Life Support)金沢は、BLS(一次救命処置)とALS(二次救命処置)を中心とした救命蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士で勉強会を行っております。

実際の訓練用の機材を用いて、手技の練習をしたり、各自の自主学習の成果を発表して、知識を共有したりするなどの活動を行っております。

多くはWS(Work Shop)と言われる、学生が企画し学生が運営などを行い開催するイベントに参加をしています。

WSはただ知識を学び実践するだけでなく、議論や話し合いをすることで人の意見に触れたり、インストラクションやファシリテーターを体験することで、今までとは違った視点で物事を見つめることができます。全国各地で年に数回、BLSやALS、外傷などを扱ってWSが開かれています。

いままではサークルの人数も少なく、一部の部員が全国のWSに参加し、そこで学んできたものを共有することが多かったのですが、4月の新歓で多くの一年生が入ってくれたこともあり、サークル自体の規模が大きくなったため、今年は

以前よりもたくさんの新しいことに挑戦し、救急医療のたくさんの面を知ることができました。

2月に金沢大学内でBLS WSを初めて開催し、自大学での繋がり的大事さ、運営することの大切さなど、救急の面以外にもたくさんのことを感じました。

また7月と9月には、北陸で初となる災害医療のWSを開催し、普段学ぶ救急の現場よりも多くの負傷者が発生したときにどうすべきか、近年の災害件数の増加から私たちはどう備えるべきか、みんなが抱える災害のイメージはなにか、など救急という枠を飛び越え、ふと日常を考えるきっかけとなるような素敵な機会になりました。

救急は医療の中でも日常に起こりやすい、日常にあるものです。学校で知識として学んだけれど、実際に目の前に人が

苦しんでいたら動けない。

そうではなくて、人にふれあいの意見を感じることで、「もし万が一」の時に考えられる、そして動ける、動かせる人になる、そんなきっかけを、WSでの体験やサークルでの活動を通して学ぶことができていると感じます。来る2月には第2回金沢大学内BLS WSを開催いたします。このWSで学んだ内容が何らかの形でみんなの糧となるように、救急医療の広がりを感じてもらえるように、そんな思いを持って準備に励んでいます。

最後になりましたが、ご指導ご協力くださるOB・OGの先生方や、私たちの活動を支えてくださる救急部、集中治療部そして十全同窓会の先生方に厚くお礼申し上げます。

(医学類3年 田中瑠実子：記)



俳句紹介(十全昔話にかえて)

研修を終へて出づるや冬の星

去年今年またぎぬ手術着のままで

良き主治医でありたき願ひ年の暮

二人して老い口にせぬ小春かな
NHK全国俳句大会入賞

難物の手術し遂げて柚子湯かな
日本臨床整形外科学会俳句大会最優秀賞

注射よりゴジラが打てば良い調子
松井秀喜の出身地根上の患者さま

パ―だけが出る嬰兒にグーを出し

嬰笑ひナースも笑ふ初春の診察室は温もりに満つ
えい

かねてより十全昔話にご寄稿をお願いしていた勝木道夫先生(昭和30年卒業)は平成31年1月21日に逝去され、掲載は叶わないこととなりました。過日奥様より丁重なお挨拶の手紙を編集部宛に頂戴し、その中に先生の俳句が添えられていました。これらの句は、先生が上梓された句集「^{あし}芦の^{つの}角」[勝木羊露(道夫)；発行人勝木満子；マルト株式会社；2016年]に収められています。

ここに紹介し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

元日も愚直に生きる白衣かな

初仕事優しき人に会ふ如く

老患や年賀も聞かず愚痴あふれ

夏一学期末部活が活性化して近し肘痛の子らの暑き列

老い払い白衣装ふ酷暑中

膝患者遍路出来たと阿波土産



十全昔話

許されて50年

八田 一郎

(昭和38年卒業)

令和元年6月に医院開設50年を迎え、これを機に今までを振り返ってみました。

私が生まれ育った京都の地で、町医者になろうと決心したのは、たぶん高校生になってからだと思います。第2次大戦中の昭和18年に、幼稚園で僕が麻疹にかかり、4歳下の数え年3歳の留美ちゃんに感染して死んでしまいました。私と2歳下の妹は軽く済んだのですが、留美ちゃんの麻疹は重症で脳症になりました。私は留美ちゃんがかわいくて大好きでした。入院する前に往診の先生と母親に、「麻疹にかかりたてのあんたの血を留美ちゃんにあげたら、留美ちゃんが元気になるかもしれない」と言われ、留美ちゃんに私の血をあげることにしました。私は怖がりで、痛がりだったのですが、この時は血管に針を刺されてもちっとも痛くありませんでした。しかし、私の血をあげても留美ちゃんは少しもよくなりません、悪くなるばかりです。それで、京大病院に入院しましたが、当時は、医者はほとんど病院にいませんでした。医師が戦地に駆り出されて病院に残っている医師が少なかったのです。母は、高熱でうめいている留美ちゃんの頭を冷すために、灯火管制の中、暗い、長い廊下を何回も往復して、氷枕に氷をいれに行くだけで、この間診察はしてもらえず、診察してもらったのは、入院した時と息を引き取った時だけだったと言っていました。

昔は、「親に先立つ不孝の縁」と言って、親に先だって死んだ兄の葬儀には両親は墓場まで行くことが許されませんでした。尋常小学校入学前の、長男の僕が代表で位牌をもってお墓に行きました。お墓は

父の勤めていた武田薬品工業の薬用植物園のそばにある一乗寺共同墓地です。土葬で葬られました。父がこんな小さな子を焼くのは可哀そうだったからです。昔の、木のリング箱ほどの小さな棺桶が荒縄で縛られて、それが墓穴の底深く、沈められていきます。その上をスコップで土砂が投げ込まれ、棺桶に当たった土砂が、ガラガラと音を立てながら、盛り土の墓が出来上がりました。私に、修学院の町医者になりたいという気持ちを駆り立てたのは、この経験が心の奥にあったからだと思います。

私は卒業後京都に帰り、自分が学生時代に雇った腎臓病のことを研究したいと思って、京大第3内科に入局しました。その後、当時の大学紛争を機に、念願の生まれ育った比叡山のふもとの修学院の地で、内科医院を開業しました。そして、今、開業50年をふり返って思うのですが、私は医者として実に、いっぱい過ちを犯してきました。私は死亡診断書を100通以上書きました。僕らの若い頃は先輩から、「患者100人殺したら一人前の医者になれる」と言われました。今はこんな乱暴なことをいう先輩はいません。医学は経験の学問で、その積み重ねが実力になって蓄えられていきます。怖がっていたら何もできませんが、しかし、慎重の上にも慎重が必要です。そして誠意をもって患者さんに説明し、お互いの信頼関係の上に立たなければ、医療はできません。しかし、失敗したときはつらいです。いっぱい悔います。何日も眠れません。そして、謝り続けます。50年間その連続でした。こんなことがありました。中学が同学年のAさんが、診察に来ていて、ある時、「最近尿の勢いがなくなってきた」と訴え、超音波検査で見ると、前立腺に肥大が見つかりました。しかし、前立腺の腫瘍マーカーのPSAが正常範囲でしたので、前立腺肥大症として治療しました。その後、一時症状が改善したようにも見えたのですが、徐々に尿の出が悪くなり、超音波検査でも前立腺がだんだん大きくなってしまし

た。しかしPSAは何回測定しても全く正常値です。これで安心してしまい、しばらく様子を見ていましたが、やはり尿は出にくくなるばかりです。原因究明のために、京大病院の泌尿科を紹介しました。京大病院では前立腺のバイオプシーを受けましたが、なかなか診断がつかず、1カ月以上たってやっと肉腫であることが判明しました。肉腫はがんとは発生機序が異なり、骨や筋肉に発生することがあります。前立腺に肉腫が発生するとは、僕は全く予想していませんでした。Aさんは、がんではなくて肉腫であったためにがんの腫瘍マーカーのPSAが上昇しなかったのです。後でわかったことですが、まれに前立腺にも発症することが、文献を調べて分かりました。全身の悪性腫瘍の中でも肉腫は発生頻度が少なく、希少悪性腫瘍として国立がんセンターや関西では大阪府医療センターで集中的に研究治療が進められています。Aさんもこの両方の病院を受診され、ありとあらゆる治療を受けられましたが、病気は悪くなるばかりで、最後はパテスト病院のホスピスで過ごされました。Aさんは最後まで生きる希望を捨てず、最後まで立派でした。息を引き取る前日にお見舞いに行った時もAさんは、まだ絵が描きたいと自分の描いている構図を私に話してくれました。Aさんは陶芸家で、中学を卒業して、陶芸の研修所で修行してからずっと、陶芸の絵付け一筋にやってこられ、伝統工芸士で、京都伝統工芸展に毎年出展されていました。今も、私は毎朝、A君に「僕が怠けていたために、さぼっていたために、手遅れになってしまっただけで、ごめんなさい」と謝り続けています。せめてもう少し早く見つけたら、良くなれたのではないかと今も悔いています。私は50年間開業医をやってきて、こんな失敗ばかり犯してきました。そして謝り続けて、許してもらってここまで歩んで来られました。許しがないならば今日までやってこられなかったことを思い、許して下さった患者さんお一人一人に申し訳なく感謝しています。

心に残る患者さん

宮森 勇

(昭和46年卒業)

昭和46年に第二内科に入局したころの話です。当時は希望する研究室に配属され研修を始めるのが教室の慣例だった。私は内分泌研究室で副腎ステロイドホルモンの測定に関わるようになった。最初に竹田亮祐先生にコルチゾールの比色法による測定の手ほどきを受けた。血漿10mlから小さい分液漏斗を用いてメタノールで抽出しPorter-Silber反応により硫酸蛍光法で測定する方法である。短時間で測定でき手技も比較的簡単であったので予備知識のない私にも定量できた。間もなく関連病院へ出張する時期となり昭和48年4月から厚生連高岡病院にて6カ月診療に従事した。ある日外来に中心性肥満、満月様の赤ら顔、高血圧の中年男性が受診され一見して典型的なクッシング症候群であった。早速、血漿を研究室に持ち帰りコルチゾールを測定すると明らかに高値であった。自身でクッシング症候群を診断し得たので感動した。この症例では低K血症を伴っており転院後の教室のカンファランスでは鉱質コルチコイドの同時産生や副腎癌との鑑別などが議論された。当時はACTHの測定が困難で、病因の主座を決めるにはデキサメサゾンやメトピロンなどによる抑制や負荷試験の結果から副腎性と診断された。画像による局在診断は気後腹膜法(pneumoretroperitoneum)で行われた。その所見は記憶していないが泌尿器科にて両側の副腎全摘術が実施された。入局して初めて手術に立ち会った症例であったこともあり両側の副腎に累々とした小児の拳大の腫瘍が摘出されたときはその大きさに驚いた。肉眼的に黒色調や色素沈着はなかった。術後はハイドロコチゾンの補充療法が開始された。低

K血症や高血圧、クッシング様の体形がほどなく改善していった。

この症例を経験してこれまで45年余が経過している。その間の内分泌学の進歩によって当時の疑問点がいくつか明らかになっている。今となって実証は困難であるが振り返って考察すると：

・両側の副腎巨大腺腫はAIMAHだったのでは？

高齢男性に好発し、両側副腎皮質における自律的なコルチゾール産生があり、下垂体には異常を認めない。病理学的には両側副腎の著明な腫大、多数の結節が見られた点でACTH非依存性大結節性副腎過形成(AIMAH)に合致する。残念ながら当時の病理組織所見は手元に残っていない。

・低カリウム血漿を呈したのはAME症候群が原因か？

AMES (Apparent Mineralocorticoid Excess Syndrome) はコルチゾール代謝酵素(11 β 水酸化ステロイド脱水素酵素)の遺伝子異常によって発症する遺伝性高血圧症である。しかし本酵素の遺伝子変異はなくてもコルチゾールの過剰があれば基質飽和により代謝を免れたコルチゾールがアルドステロン受容体(MR)に結合する。その結果、コルチゾール依存性のMR刺激が生ずる。この病態はコルチゾール(F)とその代謝物であるコルチゾン(E)の比が高値を示すことで診断される。当時このような概念や測定法は確立されていない。その後経験した類似症例で尿中ステロイドの解析を旧知の米国オークランドのDr.Schackletonに依頼し結果を得たとき(図1)本症例のことが想起された。なおAMEの前提となるコルチゾールがアルドステロンと等親和性にMRと結合する現象を発見したのは豪州J.Funderで親日家でもある

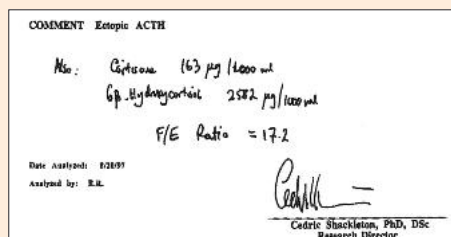


図1 Schackleton ラボからの報告



・自殺と副腎全摘後のホルモン補充療法の関連は？

この患者さんは副腎摘出術数年後に入水自殺したことを知らされた。その際、原因がクッシング症候群に関連していたのか気になった。生涯にわたって必要となる補充療法について十分説明していたか。投与量は適切であったかなどである。本例でも副腎全摘後はハイドロコチゾンで補充療法が継続されていたが、その詳細は年月を経て記録は残っていない。私のステロイドの補充量や投与タイミングが適切であったのか危惧される。数年前、米国内分泌学会に参加した時、補充療法に関する企画があった。患者さんも聴衆に加わっていたので公開講座だったと思う。主に薬物動態からみたきめ細かい投与法の検討であったように記憶している。発表を聞きながら投与量が過剰でなかったのか反省した。

・副腎皮質癌であった可能性は？

本症例はAIMAHであるが、術前鑑別診断で副腎癌をどの程度否定しえたのか。副腎皮質癌(ACC)は100万人に1人の発症率と極めて少ない。機能性副腎癌はさらに稀有である。ACCの診断は最近では遺伝子診断が導入されている。Ki67、IGF2などの発現が悪性を示唆する所見である。最近では更にWnt pathway の変異やDNAのメチル化などの解析を基にサブタイプ別に予後判定や分子標的治療が行われつつある。令和最初の日本内分泌学会が仙台市で開催され特別講演として米国でG.Hammer 先生が来日された。同博士は米国の副腎癌の臨床研究を行っていることで著名であるが、今回偶然氏の座長を依頼された(写真)。講演では副腎癌サブタイプの中にはステロイド産生能が高く予後不良に分類される亜群があることが報告され再び症例を想起した。

副腎内分泌学を学ぶ過程で多くのことを教えてくれた1例であった。

学生コーナー

臨床実習を 前にして思うこと

医学類 4 年

伊藤 恵祐

まずはじめに医師という職業を見つめ直す機会となった話をしたいと思います。自分は部活でソフトテニス部に所属しているのですが令和元年の春、部活中に足首を痛めることがありました。最初はよくあることだと思い軽くアイシング程度で放っておいたのですが、家に帰りゆっくりしようすると痛みがすごく気になりはじめ、もしかしたら骨折ではないかなどと不安になりました。ちょうどそのとき整形外科の授業でスポーツ外科をやっていたところだったので先生の授業で習ったようにRest(安静)、Ice(冷却)、Compression(圧迫)、Elevation(挙上)とよばれる早期対応を試みたが、いつもの捻挫より痛いような気がしてなかなか落ち着けませんでした。次の日、さっそく病院を受診してみると、担当の先生が金沢大学のOBの方でレントゲン写真をみながら解剖学の知識も含めとても優しく説明してくださいました。結果的には捻挫で済んでよかったのですが、そのとき改めて思ったのが医師は病気を診断するだけではないのだなということです。ただ病名をあてるのではなく患者さんの不安を取り除くことのできるプロなのだ。と改めて実感しました。今回担当してくださった先生は不安を取り除いてくださるだけでなく、自分にあったリハビリテーションまで提案して下さり、おかげで3週間後に控えた試合にケガを完治させた状態で無事出場することができました。あの時病院に行かずに自分なりの処置でごまかしていれば、もしかしたら悪い癖がでてしまい、その試合だけでなく今後の自分の部活動にも影響が出ていたかもしれません。

自分は10月にStudent Doctorになるために設定されているCBT試験とPreOSCE試験という2つの試験を受けました。このときの試験勉強は4年生の時点で知っておくべき有名な症状や病気、生理などを5択の選択肢から選ぶ問題の演習の繰り返しで、直前期における勉強はクイズのように問題の病名と自分の答えがあたっているかばかり気にしていました。もちろん正解することも大事ですが、今回担当してくださった先生のように患者さんサイドになって説明ができるか、患者さんの不安を取り除けるような会話ができるかという点も同じかそれ以上に大事だなということに自分の経験を踏まえて確信することができました。今、僕は12月から臨床実習という実際の現場での実習を行います。この実習参加にあたってオリエンテーションでは先生方皆さん口をそろえて患者さんに対する責任感や姿勢の大切さ、実習における学生の立場や行うべきことを熱弁してくださいます。でも実際、現場に出ていないため今ひとつイメージしづらく、今どのような医師になりたいかと聞かれても臨床の現場に出てみないとはっきりとしたことはわからないというのが本音です。高校生の時に漠然と思い描いていた医療現場の場面をいよいよ目にできるということにワクワク感がありますが、緊張のほうはやはり強いです。

先日、北海道大学大学院理学研究院の角五彰准教授の研究であるATPをエネルギー源とする分子ロボットがニュースに取り上げられていました。なんでもATPをエネルギー源とするモータータンパク質キネシンとダイニンを駆動力として動く世界最小の分子ロボットが誕生したらいいです。ATPは生物のエネルギー源でもあるため私たちの体の中に豊富に存在しています。生体内にある物質をエネルギー源にするのだから、生体内で病気の治療などの任務を行うことを考えたときにエネルギー供給の心配をしなくてもよいという画期的なロボットです。

またこの分子ロボットはなんと群れ

ることによって人工分子筋肉とよばれる筋組織をつくりあげ筋収縮をおこなうことができ、生体によく適合する必要がある医療用分子ロボットとしての応用が期待されているそうです。つまりこれまで治療するにも届かなかった部分にも目が行くことになり、そう遠くない未来に、小さなロボットを私たち医療者が積極的に使用する日も近いといえます。時代は次々と医療機器をはじめ薬、治療が変革しつつあるといえます。すさまじいスピードで新しい治療方針にとってかわられ医学生に求められる知識も必然的に多くなっており患者さんに聞かれたときに「知らなかったです」や「初めて聞きました」ということは信用の低下につながりかねないと思います。医師は生涯現役で社会との関わりがもてるというのも魅力ですが、無知による危険が隣り合わせであることもまた知っておかねばなりません。また最近なにかと医師の逮捕や医療事故などを耳にすることが多いです。先述した実習参加にあたってのオリエンテーションでは訴訟保険の話も出たほどです。自分もStudent Doctorですが医療事故を招く可能性を持っているということは常に頭に入れておくべきと思いました。

ここまで気を引き締めなければならぬことばかり書いてきましたが逆に楽しいこともあります。それはやはり実際の雰囲気を目にできることです。炎症所見の読み方や身体診察、診療所や地域医療や訪問診療の特徴などを目の当たりにすることで医師の仕事や病院の機能、自分がどのような雰囲気が好きかなどといったまだ自分の知らないことがわかるようになるのはすごく楽しみです。多くのスタッフや上級医の方に教えていただくことでもっと学んでいきたいです。また今年から少しカリキュラムが変更になり、より学生が医療手技を学べるようになり、実習期間も去年より大幅に引き延ばされました。いよいよはじまる長期間にわたる臨床実習を前に気を引き締めて頑張りたいです。

第13回金沢大学ホームカミングデイ開催

令和元年10月26日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第13回金沢大学ホームカミングデイを開催しました。歓迎式典には215名、懇親交流会には183名の卒業生及びそのご家族等にご出席いただき、大変盛況で賑やかな1日になりました。

歓迎式典では、最初に、本学合唱団及び出席者全員で校歌を斉唱しました。続いて、山崎光悦学長の歓迎挨拶、山出保金沢大学学友会会長の祝辞の後、福森義宏理事・副学長から金沢大学の近況が報告されました。最後は、現役学生の現状について、学生の留学体験報告(2名)・課外活動体験報告(1名)を実施し、出席者からは好評をいただきました。

特別講演では、「“Own It!”行動せよ～明日のために、今、できること～」と

題し、ファイザー株式会社代表取締役社長原田明久氏(昭和61年医学部卒業)に、ご講演いただきました。

歓迎式典終了後には、金沢大学学友会第9回役員総会が開催され、山出保学友会会長の再任を含む役員の選任が審議されました。

夕刻からの懇親交流会は、山出保学友会会長の乾杯の発声で始まりました。会場では、本学卒業生の女性アマチュア木管アンサンブル〈ナチュール・クインテット〉により、開始前と乾杯後に演奏をしていただき、懇親交流会を盛り上げていただきました。その後、恒例の揃いの法被に身を包んだ卒業生有志による「金沢大学校歌」、「北の都」、「南下軍の歌」の高唱があり、会は大いに盛り上がりました。

また、午前中にキャンパス見学会(4コース：71名)を実施しました。

次回、第14回金沢大学ホームカミングデイは、令和2年10月31日(土)に開催が決まりましたので、校歌を歌いに、懐かしい母校にぜひお越しください。

(学友支援室長 村田 記：記)



原田明久社長による特別講演の様子

お知らせ

2020年度は同窓会名簿の改定を行います

金沢大学医学部十全同窓会 会員情報変更サイトをご活用ください

URL <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

TEL : 076-265-2132

Email : juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

12月上旬発行予定

令和2年度会費納入の会員に発送いたします。



会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。

会費納入にご協力下さいます様お願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせ致します。

①自動引き落とし(手数料本会負担)

本年度より取り扱いを開始いたします。お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛お知らせください。

折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。

是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②払込用紙(手数料本会負担)

従来通りの「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済(ネットバンキング)

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。

(お振込の際は、ご氏名の前に会員番号のご入力をお願いいたします)

北陸銀行 小立野支店

普通預金 6051047 金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局

TEL: 076-265-2132 FAX: 076-234-4208 Email: juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

薬価基準収載

抗悪性腫瘍剤(イリノテカン塩酸塩水和物)
創薬・処方箋医薬品※
カンプト®点滴静注 40mg
100mg

代謝拮抗性抗悪性腫瘍剤(ゲムシタビン塩酸塩)
創薬・処方箋医薬品※
ゲムシタビン点滴静注用 100mg
200mg「ヤクルト」

アロマターゼ阻害剤、閉経後乳癌治療剤(レトロゾール)
創薬・処方箋医薬品※
レトロゾール錠2.5mg「ヤクルト」

副腎癌化学療法剤、副腎皮質ホルモン合成阻害剤(ミトタン)
創薬・処方箋医薬品※
オペプリム®

抗悪性腫瘍剤(オキサリプラチン)
毒薬・処方箋医薬品※
エルプラット®点滴静注 50mg
100mg
200mg

タキソイド系抗悪性腫瘍剤(ドセタキセル)
毒薬・処方箋医薬品※
ドセタキセル点滴静注 20mg/1mL
60mg/4mL「ヤクルト」

骨吸収抑制剤(ゾレドロン酸水和物)
創薬・処方箋医薬品※
ゾレドロン酸点滴静注 4mg/100mL
4mg/5mL「ヤクルト」

※注意—医師等の処方箋により使用すること
●「効能・効果」、「用法・用量」、「警告・禁忌を含む使用上の注意」等については添付文書をご参照ください。

抗悪性腫瘍剤(カペシタビン)
創薬・処方箋医薬品※
カペシタビン錠300mg「ヤクルト」

抗悪性腫瘍剤(シスプラチン)
毒薬・処方箋医薬品※
シスプラチン点滴静注10mg
25mg「マルコ」
50mg

活性型薬酸製剤(レボホリナートカルシウム水和物)
処方箋医薬品※
レボホリナート点滴静注用 100mg
200mg「ヤクルト」

前立腺癌治療剤(フルタミド)
創薬・処方箋医薬品※
フルタミド錠125「KN」

人も地球も健康に
Yakult

抗悪性腫瘍剤/上皮成長因子受容体(EGFR)
チロシンキナーゼ阻害剤(ゲフィチニブ)創薬・処方箋医薬品※
ゲフィチニブ錠250mg「ヤクルト」

抗悪性腫瘍剤/チロシンキナーゼインヒビター(イマチニブメシル酸塩)
創薬・処方箋医薬品※
イマチニブ錠100mg
200mg「ヤクルト」

前立腺癌治療剤(フルタミド)
創薬・処方箋医薬品※
フルタミド錠125「KN」

2019年6月作成

〒104-0061 東京都中央区銀座7-16-21 銀座木挽ビル

0120-589601 (医薬学術部 くすり相談室)

〈資料請求先〉株式会社ヤクルト本社

 ホテル日航金沢

幸せ時間は、
いつもここに。
25th

SPECIAL THANKS!

おかげさまで ホテル日航金沢は 開業25周年を迎えました

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六園口前)

Tel : 076-234-1111 Fax : 076-234-8802

ホテル日航金沢

検索

www.hnkanazawa.jp

 **nihon
medi+physios**

明日の幸せを願い、
「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの
早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、
がん治療用の医療機器、疼痛緩和に有効な治療薬などの
創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

f o r t h e h a p p i n e s s

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)

<http://www.nmp.co.jp/>



日本メジフィジックス株式会社

2018年8月作成

会報編集委員の紹介

学内編集委員(14名)

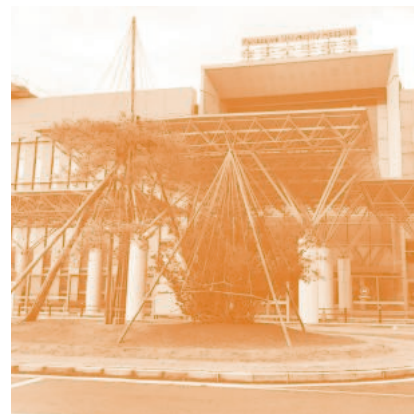
太田 哲生
蒲田 敏文
中村 裕之
横山 茂(副編集委員長)
絹谷 清剛(編集委員長)
篁 俊成
和田 隆志
佐々木素子
谷口 巧
山本 靖彦
中田 光俊
倉知 慎
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(20名)

山口 成良
津川 龍三
赤祖父一知
佐藤 保
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
中本 安成
常山 幸一
古川 健治
若山 友彦
中西 清香

以上34名で構成されています。

土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。



表紙の写真

のとキリシマツツジ(樹齢約300年) と雪吊り

正面玄関の前にあるロータリーには植樹がされ、冬になると金沢らしい雪吊りのある景色が楽しめます。バスやタクシーなどが発着する場所には、大きな屋根や通路シェルターが整備されており、雨や雪に濡れることなく院内へ移動できます。

題字：中村 信一(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会

会報編集委員会

〒920-8640 金沢市宝町13-1

<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和2年1月18日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

今年度より同窓会会費を1月号に併せて徴収させていただくこととなりました。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。
名簿改訂は5年毎に変更となりました。2020年改訂版は、従来と同様に会費納入者へお届けいたします。

編集後記

新元号「令和」の発表とともに始まった今年度も、締め括りに向かっています。この時期、私が担当する保健学類看護学専攻では、看護研究(卒業研究)の発表に向けた準備が佳境を迎えます。看護研究では、がんや延命治療など医学研究でも対象となるテーマを扱いますが、研究内容や考察は看護学を基盤とします。そのため、学生と議論をすると、時に私の知らない看護学の理論やスキルに話が及びます。看護師とともに働いていても、看護職が修得している専門性に対する理解は不足していたことに、改めて気付かされます。

この時期はまた、入学試験のシーズンでもあります。この会報が皆様のお手元に届く頃には、最後の大学入試センター試験が行われていることと思います。令和3年度入試

から、大学入学共通テストが始まりますが、金沢大学の個別学力検査においても様々な変更が予定されています。中でも、新たに開始されるKUGS特別入試(学校推薦型選抜等)に係る「KUGS高大接続プログラム」は、高校生等が当該プログラムを受講して出願資格を得るもので、今年度からすでに始動しています。「学生あつての大学」であることを思う時、当該プログラムの実施が、教員にとっても、高校生等に向けた情報発信のあり方や学類のあり方を考える機会になっているように感じます。

今回の会報も話題を満載しております。この会報が、同窓会会員の皆さまのひとときの憩いになれば幸甚に存じます。

(毎田 佳子：記)